
こんな、横島忠夫はどうでショー!!

乱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんな、横島忠夫はどうでショー！！

【Nコード】

N3673V

【作者名】

乱

【あらすじ】

これは作者の乱がその妄想と煩惱を融合させて書きあげた様々な世界の横島の短編集です。基本的にプロットなどは立ててはいません。元ネタとなった話はTINAMIやArcadiaに投稿していて、Night Takerからもネタを引っ越ししてきました。

G×S!なTick!Tack!1(前書き)

この話はもしもG×S!にTick!Tack!な展開があったとしたらというifの物語で「G×S!夕陽が紡ぐ世界」本編とはつながりの無い別の話です。なので本編では過去において横島とフォーベシイ達が出会ってたと言う事はありません。

G x S ! な T i c k ! T a c k ! 1

「忠夫さま。今日はお母様が昼食を作って下さるそうです」

「へえ、そうなんだ。そう言えばセージさんの食事を食べるのは“こつち”では始めてだな。で、フオっちゃんは？」

「お父様は何か本邸に用事があるらしく魔界に帰っています」

横島は今、魔王邸に居る。

シアや稟に楓達は其々に用事があるらしく此処に居るのは横島にネリネ、そしてネリネの母親のセージの三人だけである。

横島の言う『こつちでは』と言うのは実は横島・ネリネ・麻弓・樹の四人はネリネの家にあった鏡型の次元転移の魔法具の暴走によって過去の魔界へと飛ばされた事があったのである。

其処で過去のフォーベシイ達に接触した事により歴史に僅かな狂いが生じ、ネリネが生まれない歴史に書き換えられるかもしれないといった事態になった。

過去の魔界では色々な事があったが、何とか歴史通りにフォーベシイとセージは結ばれる事となり、横島達が無事に元の時間に戻って来てから数日が立っていた。

まあ、過去の魔界では横島的にも“色々”あったのだが……

「何がともあれ」

ヒョイッ

「ひゃっ！！た、忠夫さま／＼」

横島はそう言いながら横に座っていたネリネを横向きに抱え上げ、
（いわゆるお姫様抱っこ）自分の膝に座らせる。

「ネリネが無事で良かったよ」

「は、はい。私もこうして忠夫さまと居られて幸せです」

ネリネもまた、そんな横島の胸に寄り添いながら赤く染まった顔を
横島に向け、ゆっくりと目を閉じる。

「ネリネ……」

横島もそんなネリネに顔を近づけ、唇を重ねようと……

コンコン

「うわっ！！」

「きゃっ！！」

した所に部屋の扉をノックされる。

「ネリネちゃん、忠夫君。昼食の用意が出来ましたよ」

そう言いながら扉から顔を覗かせるのはセージ。

横島とセージは過去での出会いが最初だったが、今では家族同様に
付き合っている。

あの時から本来の時間では20年立っているのだが髪が伸びた事以
外は全く変化が無く、未だに十代と言っても違和感のない若々しさ

である。

そんなセージの視線の先には今まさにキスの寸前だった二人が固まっていた。

「あらあら……。もしかしてお邪魔だった？」

「い、いえっ！！ちょうど行こうと思ってた所です／＼」

「そ、そうっスよ。わはははははは」

「…お姫様抱っこで？」

セージはニヤニヤしながら二人を見つめ、横島とネリネは何も言えずに赤くなるだけだった。

そして三人は食堂に移動する。

「さあ食べましょう」

「へえ、井っスカ」

「ええ、召し上がれ『親子丼』」

「ブッフー！」

「ひうつ！！／＼／」

「ななななな……？」

そのセージの言葉に動揺していた二人だったが、一瞬早く意識を覚醒させたネリネは横島の首根っこを掴んで部屋の隅に移動する

（た、忠夫さま、お母様の記憶は文珠で忘れさせたんですよね？）

（あ、ああ。ちゃんと帰り際に【忘】の文珠を渡してきたぞ）

（渡しただけなんですか？使わなかったんですか？）

（だって、ちゃんと自分で使うと思ったから…）

（はあ…何で忠夫さまは女の子の気持ちにそこまで鈍感なんですか

?)

(い、いや、さすがに、結婚前には“あの記憶”は消すだろうと…)

そんな二人にセージは笑顔のまま話しかける。

「どうしたの、二人とも？」

「いえっ！何でもないっス！」

「そ、そうです。何でもありません」

「へえ、そお…」

セージは何やらニヤニヤしながらポケットからソレを取り出した。

「ひょっとしてこれの事かな？」

「なーーーーー！！！！／／／」

「ひゃわーーーーー！！！！／／／」

セージの手の平の上には【忘】の文珠が光っていた。

「忠夫様からいただいたものですもの。お守り代わりに大事にしましたよ」

「お、お母様：／／／」

「何ですか？ネリネ様」

セージの笑顔はあの時のままだった。

「そう言えば私の料理を食べていただくのは20年ぶりになる訳ですよね。忠夫さま、久しぶりの私の手料理は美味しいですか」

「は、はあ／／／」

「味なんかしません／／／」

そんな微妙な空気の中、横島は気になる事をセージに聞いてみた。

「し、しかし何で記憶を消さなかったんスか？」

「あら、女の子にとつての初めては大事なモノなんですよ。ましてやそれが、自分の意思で捧げたモノならなおさらです」

「まあ、否定はしませんが。というよりお母さま、文珠で記憶を消さなかったという事は忠夫さまとの事は最初から知ってたんですか？」

「ええ、知ってたわよ」

「ならおじさんも？」

「はい、わざわざ教えて歴史が変わるのを恐れて黙ってただけで、忠夫さまがネリネちゃんを救ってくれるのも知ってましたよ」

「そうっスか」

「ただ、その為に平行世界に飛んでしまう事を知っていながら何もしてあげる事が出来なかったと後悔してましたよ」

「それはいいんです。そのおかげといっては何ですが美神さんやおキ又ちゃん、ルシオラにも会えたんですから…」

「そうですか、私も会いたかったな。ルシオラさんに」

セージは横島を優しい目で見つめながらそう言った。

そんな中、横島はふと頭に浮かんだ疑問を口にした。

「…ちよつと待て…ネリネ、一つ聞くがアイさんはあれからどうなつたんだ？」

「はい？…そういえばアイさまはずっと独身を通されて…」

「呼んだ？」

其処に、笑顔と共に現れたのはあの頃と全く変わらないアイであつ

た。

「うわっ！ア、ア、アイ……さん？……」

「ア、アイさま！？」

「ふむふむ」

アイは微笑みながら横島に近づき、

「は、はは」

「じろじろ」

横島の体を回りながら見回し、

「ぺたぺた」

横島に触れ、その感触を確かめ、

「くんくん」

横島の匂いを嗅ぎ取って行き、

「ア、アイさん／＼／」

「ア、アイさま、何を？」

笑顔で指を花丸を描く様にくるくる回す。

「うん、花丸で合格。間違いなく忠夫くんだ」
「お、お久しぶりっス」

そしてアイはもう我慢が出来ないといった感じで、瞳を潤ませながら横島に抱きついた。

「やっと、やっと会えた。忠夫くん…20年は長かったよ…」

「アイさん、また会えて嬉しいっス」

そう言つて横島も優しくアイの肩を抱いた。

そんな二人を優しくに見守っていたネリネだが、ふと頭に浮かんだ疑問を聞いてみた。

「アイさま、あのひょつとして忠夫さまに…」

「うん、愛してもらったよ。ね、セージさん」

「ア、アイさま！！／＼／」

セージも、まさかネリネの前ではらすとは思つて無かったのか顔を真っ赤に染め上げる。

「お、お母様！アイさまとも！？」

「ふゝん、『お母さまとも』ねえ。実の子供だったという事を知らなかったとはいえ。セージさん、親子井なんて大胆ね」

「くくくく／＼／」

横島は横島でただ呆然と混乱していた。

「やあやあ、何やら賑やかだね」

其処にのほほんとした笑顔で現れたのはネリネの父親でセージの夫でもある魔界の王、フォーベシイである。

「お、お父様、魔界に用事があつたのでは？」

「うん、あつたよ。だからアイちゃんが此処にいるんじゃないか」
「じゃあ、パパの用事って」
「アイちゃんのお迎えだよ。いつまでもアイちゃんを仲間外れにしてる訳にもいかないだろ？」
「そういう事だからこれからは私もよろしくね」
「はははは……よ。よろしくっス」
「楓さん達への説明が大変ですね……」

そしてフォーベシイは横島の肩に手を回し、ハイペロン爆弾級の爆弾発言をかましてくれた。

「まあ、これからもよろしく頼むよ忠夫ちゃん。何しろ僕達は『ある意味兄弟』なんだからね」

「はい？……あんた、知つとったんか……いつ！？」

「お、お母さま……」

「だって、さすがに隠したままには出来ないわよ」

三世界は今日も平和であつた。

「ちゃんちゃん」

END

G×S!なTick!Tack!1(後書き)

と、言う訳であります。

ちなみにこの横島はリコリスとのイベント以外はフルコンプしているらしいです。

G x S! な T i c k ! T a c k ! 2

「アイちゃん、お久しぶり」

「リアちゃんもお久しぶりね」

アイが来たと聞いてユーストマの妻でシアとキキヨウの母親のサイネリアがやって来た。

「つーか、リアさんもあの時の記憶を持ってたんスね」

「内緒にしててゴメンね、忠夫くん」

サイネリアが過去の魔界で横島やネリネ達と出会っていたと聞いてユーストマは何やら仲間はずれにされた子供の様に？れていた。

「何でえ、何でえ、まー坊もサイネリアもよう……、そんな大事な
こと俺に内緒にしてるなんて水臭えじゃねえか」

「ははは、仕方ないじゃないか神ちゃん。事が事だけにあまり噂を
広める様な事はしたくなかったんだから」

膝を抱えていじけているユーストマの肩をフォーベシイは優しく叩
きながら慰めている。

そんな時……

「陛下、ちょっと（三時間ほど）お風呂をお借りしてもいいですか
？」

「アイちゃん、お風呂入るの？私も入ろうかな」

ザワワッ!!

楓や稟達は平然としているが、麻弓や樹、シア達は驚いている。

アイは無類の風呂好きで、一度入ると2〜3時間は当たり前のように入ったままで、それを一緒に入った者にも強制するので、サイネリアが自分から一緒に入るといふとは思わなかったからだ。

「そうだ、忠夫くんも“久しぶりに一緒に”入ろうか？」

ザワワワワッ！！？？

そんなサイネリアの言葉に辺りは騒然とする。

当然であろう、“久しぶりに”と言う事は以前、つまり過去に飛ばされていた時に一緒に入った事があると言う事なのだから。

「ど、どう言う事なんでえ忠夫殿！？」

「タダくん……、OHANASIしてくれるかな？……」

「忠夫！ーき、君と言う奴は……ネリネちゃんが大変な時に俺様を差し置いて一体何をしていたんだい？」

「忠夫くん……不潔なのですよー！」

「ヨコシマ……、私とも入ってくれた事は無いくせに……」

「さあ、隠し事はせずにちゃっちゃと本当の事を……忠夫殿？」

勢いよく捲し立てるユーストマ達とは逆に横島はネリネの膝にしがみ付いて何やら怯えていた。

「お風呂キライ、お風呂キライ、お風呂キライ、お風呂キライ……」

「……リンちゃん、忠夫くんどうしたの？」

「あはは……、どうも神魔人形態の時に散々お風呂で弄り回されたみたいでトラウマになってるらしいです」

「……なるほど」

ちなみにどんな事があつたかと言つと……

此処は過去の魔界のフォーベシイの館。

そして、その浴場の前の廊下。

「あゝ、さっぱりした。まったく、アイちゃんてばお風呂長いんだから。しかも一緒に入ると自分が出るまで付き合わされるからアイちゃんが出るまで待たなけりゃいけないし」

（まったく……）

横島は未来においてシアの母親となるサイネリアが風呂から上がるのを待つて浴室に掛け込んだ。

「ようやく風呂に入れる。この所ムズムズして仕方がなかったんだ」

横島は服を脱ぎ全裸になると【開】の文珠を使って神魔人形態になり、背伸びと同時にその翼を思いつきり広げた。

『う〜ん』

その体は女性の物になり口調も女性のそれになる。

『この姿じゃないと羽は出せないし面倒くさいのよね。しかも一人じゃ洗いづらいし、だからと言ってネリネ達に頼むと散々弄られ回されるから一緒には入れないし…とにかく早く洗わなきゃ誰かが入ってきちゃ…』

其処に、“一時間ほど前に三時間ほど風呂に入っていて”、今は部屋で休んでいる筈のアイが入って来た。

「やっぱり、もう一回入っちゃお」

『……うから急ごうと思った矢先に…』

「……………」

そして二人は全裸同士でお互いに見つめ合う。

横島はこの状態では女性の意識が強くなる為、女性の裸を見ても興奮したりはしない。

アイは既に横島が神魔人として女性の姿になれる事は説明を受けていて知っていたが、羽根を持っている事までは知らずにいたので背中から羽根を生やしている横島を見て呆然としている。

『……あ、あの…アイさん…』

「…ひよつとして忠夫くん？」

『はい…』

「こ、ごめんなさい。私、気付かなかったわ」

そう言つてアイは浴室から出て行つた。

『た、助かつたのかな？とにかく今のうちに…』

と、思つた矢先にアイはリアを連れて戻つて来た。

「うわゝ、本当だ。綺麗な翼」

「でしょ。さあ、洗つてあげましょ」

『え、ええゝゝ！ち、ちよつとアイさん、何をするつもり？』

「何つて、一人じゃ洗えないけど私達には頼みづらくて一人で洗おうとしたんだよね。」

大丈夫よ、私達がしっかり洗つてあげるから」

「嬉しいなー、私小さい頃絵本を見て天使様の羽を触つてみたかつたの。夢がかなつて嬉しいわ、これも日頃のラヴの賜物ね」

『い、いや、一人で大丈夫よ。だからわざわざ一人で入つたんだから』

横島は背中の中を翼を庇うように後ろ向きで逃げながら下がっていくが無論、それを許すような二人ではない。

「大丈夫、大丈夫、たつぷりラヴを込めて洗つてあげるから」

「そうよ、綺麗にしてあげるから安心して…諦めなさい」

『諦めろつて言つたー！』

手をワキワキさせながら近づいて来る二人からジリジリと下がりながら逃げようとするが

いくら広いと言つてもやはり風呂場、壁はやはり存在する。

「つーかまえたっ」

『や、やめて。私、翼は敏感で』
「どれどれ？」

サワッ

『ひゃんっ！』

「・・・」

「・・・」

カチリッ

二人の頭の中に、何かのスイッチが入った。

『や、やめて、お願いだから。許してえ~~~~！』

「元は男の子なのに大きな胸ね」

「なのにウエストは私達より細いわよ」

「それは許せないわね、もっとよく調べないと」

「さあ、本格的に洗うわよ」

『ふわああ~~~~~~~~ん！』

「忠夫さま、何があっただんですか？」

部屋のベッドでネリネに介抱されながら横島は呟いた。

『…お、お風呂…』

「お風呂がどうしたんですか？」

『…お風呂…キライ……』

「あゝ、何となく解りました…」

へとへと横島とは逆にアイとリアの肌はツヤツヤだったそう。

「そんな事があったんだ」

「お母さんったら…」

「だつて…」

そんな穏やかな、別の世界でのお話。

G×S!なTick!Tack!3(前書き)

とりあえず、Tick!Tack!ネタはこれで終わりの予定。

G x S! な T i c k! T a c k! 3

横島達が過去の魔界から帰って来て数日後の夜……

「うふふ、ヨ、コ、シ、マ」

「タ、タマモ? な、何をするつもりじゃ……?」

タマモは楓達が寝静まったのを確認すると下着姿で横島に覆いかぶさって来た。

「何をですって? 解ってるくせに」

「は、ははははは……」

タマモは正直もう我慢の限界に達していた。

横島は自分には手を出さないくせに、ネリネや楓とはしょっちゅうしてるみたいだし、最近になって魔界からアイという女までやって来たのだ。

このアイという女も横島に対しラブラブモード全開でくつついている。

ネリネにアイの事を尋ねてみたらタマモのあまりの迫力に根負けしたのかネリネは隠し通さなければならぬ秘密まで話してしまったのだ。

横島ですら消えている記憶と思っている『あの出来事』さえも……

その事はタマモにとってあまりにも口惜しい事だったが逆にその事は横島の逃げ場を塞ぐ事でもあったので良しとした。

「今日こそは逃がさないわよ」

「だから何度も言ってるようにだな、お前がダメという訳じゃなくワイはロリじゃないから今はまだ…」

そこでタマモはニヤリと笑いながら止めの呪文を口にした。

「ねりね」

ビクウツ

横島は微妙な発音で悟った。この発音はひらがなだと。

それでも冷や汗をかきながら無駄な努力をするのが横島イズム。

「ね、ネリネ？ネリネがどうかしたのか？」

「誤魔化そうとしても駄目よ、ネリネ本人に聞いたんだから。ねりねが良くて私が駄目という事は無いわよね」

「だ、だからな、あれは…」

「無いわよね」

タマモは答えを聞く前にもう、横島のパジャマのボタンを外し始めている。

横島自身、ねりねとの事は子供の姿とはいえネリネに間違いは無かったし、その想いを拒むことはネリネの存在自体を拒む気がしたからこそその事だった。

だが、今のタマモにそれを言ってもただの言い訳にしかならなかった。

「ヨコ…タダオ」

タマモはゆっくりと顔を近づけ、横島もそれを拒もうとしなかった。

「好きよ、タダオ」

「タマモ…」

横島から見ても今のタマモは綺麗だった、そして横島は諦めたかのようにゆっくりと目をつむった。

（よし、墜ちた）

そして二つの唇が重なった時、横島は堅い物が砕ける音を確かに聞いた。

ジャステイス崩壊

「いったただきまゝす」

翌日、横島はリビングにてネリネ、アイ、楓に正座をさせられていた。

「忠夫さま！これは一体どういう事なんですか？」

（いや、貴女が喋らなければこんな事には。大体何でねりねの時の

事を覚えてるんですか？)

「忠夫くん。…男の子なんだから気持ちは解るけど、少しは歳の事を考えないと」

(貴女がそれを言いますか?…イエ、ナンデモアリマセン)

「タダくん。私、私ね……」

(楓さん。お願いですからその眼で刃物を握らないでください。マジお願いします)

ちなみに稟とプリムラは家を覆う異様な雰囲気から逃れる様にすでにこの場から逃げ出している。

そして、当のタマモ本人はというと、幸せそうな顔で横島のベッドの上で丸くなっていて、時折真つ赤な顔でクスクス笑っている。

その頃、ある世界で人狼の少女が泣きながら遠吠えをしていたとかいなかったとか……

とりあえず終わってみる。

G×S!なTick!Tack!3(後書き)

少し書き直ただけで、あまり変わりはありません。

キーさんとサっちゃんの横島探索日記1（前書き）

この話は本来G×S！で行方不明になった横島を二柱が探し回ると言う設定でしたが、よく考えると不謹慎だと言う事で今回の書き直しでは本編より分離、Tick!Tack!同様に番外編として投稿します。あえて書き直しはしていませんが、今後はこの中から短編として書くかもしれません。

キーさんとサっちゃんの横島探索日記1

キーさん『さて、横島さんの搜索を再開しましょうか』
サっちゃん『せやな。早く見つけんと』

二人『面白イベントを見逃してしまう！！』

そして二人は搜索を始めた。

キーさん『おっ！横っちがおったで』
サっちゃん『どれどれ』

音姫「弟君――！何なのこの本は――！」
横島「堪忍や――！しょうがないんや、男のロマンなんや――！」

音姫「し、しかも胸が大きな本ばかり#」

横島「そ、それは……」

音姫は正座をさせた横島の前で唸っていた。

音姫「うっ、どうせお姉ちゃんは……」

そう言いながら音姫は自分の胸に手をやった。

由夢「あれ？こんな所にも隠してあるよ」

クローゼットを捜していた由夢は数冊の本を取り出した。

横島「なぬ？其処に隠した覚えは」

音姫「…由夢ちゃん、どんな本？」

由夢「こんな本だよ」

由夢から受け取った本を見て音姫は絶句した。

音姫「『可愛い妹』『妹と留守番』『妹と禁断の…』『お兄ちゃん大好き』」

タイトルを読み上げながら音姫はワナワナと震えていた。

横島「な、何じゃそれは――！そんな本を買った覚えは無いぞ！」

由夢「兄さん、言い訳は男らしくないですよ」（計画通り）

音姫「お、お、弟君……」

横島「違うんや――！ワイは無実や――！」

音姫「どうしてお姉ちゃんモノがないの――！」

参考作品・「D・C・？」

キーちゃん『どうやら彼はこの世界の横島さんのようですね』

サッチャー『そのようやな』

キーちゃん『じゃあ次に行きますか』

サっちゃん『もちつと見て行きたいんやがな』

サっちゃん『この世界はどうや?』

キーちゃん『居ましたね、さて今度は』

化粧を済ませ、ウィッグを付けると其処には絶世の美少女が居た。

このみ「た、大変であります隊長!タ、タダくんが綺麗すぎるでありますノノノ」

環「うふふ、可愛いわよタダ坊」

其処にはゴスロリ衣装で女装させられた横島が居た。

横島「も、もう勘弁してくれー、ワイが何をしたー!」

どんなに泣き叫ぼうとも横島を逃がす気は環にはさらさら無かった。

環「あ、ああ……やーん、タダ坊っては何でこんなに可愛いのか」

このみ「あー!タマお姉ちゃんズルイ!このみもー!」

二人に挟まれた横島は色々とたまったものではない。

横島「こ、こら！タマ姉もこのみもそんなにくっつかれると…ああ、
柔らかいモンが腕に……」

そうしていると扉がいきなり開いた。

シルファ「これは一体何の騒ぎですか……！」

部屋に怒鳴りこんだシルファが見たのは絡み合った三人、特に真ん
中の横島であった。

シルファ「な、な、な？」

横島「シルファちゃん……こ、これはその……」

シルファ「ご、ご、ご主人様はお、女の人らったれすか……」

横島「違……う……！」

シルファ「騙されたれす……！！」

シルファは叫びながら部屋から出て行つた。

横島「シルファちゃん……ん……！」

環「ねえ、タダ坊」

横島「なんだよ」

環「やっぱり……取っちゃおか？」

そう言いながら笑みを浮かべる環の手にはハサミが光っていた。

横島「い……や……！！」

参考作品・「To Heart 2」

キーちゃん「此处も違うようですね」
サっちゃん「ほな、次行こか」

キーちゃん「今度はどうでしょう?」
サっちゃん「お!おったで」

あこ「ん~~~~、ちゅばちゅば」
横島「む~~~~、ぷはあっ!あ、あこ姉いいかげんに!」
りこ「こら忠夫、今度は私の番だぞ」
横島「だ、だから…むぷっ」
りこ「ちゅばちゅば、うむっ…れろれろ」
あこ「あー!舌入れたー!忠夫、私も!」

参考作品・「K i s s x s i s」

キーちゃん『こ、此処は色々と危険ですね』
サっちゃん『次行こ、次!』

キーちゃん『さて、今度は?』
サっちゃん『何か嫌な予感がするんやけど』

かなめ『つぐみ、しっかりと押さえていなさいよ』
つぐみ『OK さあただお、覚悟はいい?』
ただお『嫌だー! ! 勘弁してくれ、ねーちゃーん! !』

参考作品・「巨乳家族」

サっちゃん『次――――! ! !』

キーちゃん『今度は大丈夫でしょうか？』
サっちゃん『さあ？どうやる』

横島「いーやーじゃー！やめてくれー！！」

羽「こら、騒がないの」

横島「美神さーん、おキヌちゃーん、小竜姫さまー！！助けてー！！！！」

サっちゃん『おっ、当たりか！？』

鷲「大丈夫大丈夫。天 殿も通った道なんだから」

横島「安心できるかー！！心眼、何とかせんかーい！！」

心眼『すまぬ横島。お前の体から離されては何とも出来ん』

テーブルの上に置かれた心眼は申し訳なさそうに呟いた。

羽「さあ、最後にその邪魔な一枚を」

横島「嫌ー！！これだけはー！！」

参考作品・「天地無用！」

サっちゃん『心眼があるしなんや触れてはいかん世界のような』
キーちゃん『そうですね。では次に』

キーちゃん『さて、此処は？』
サっちゃん『どうやらな？』

横島「美神さんやおキヌちゃん達、元気にしてるかな？」

サっちゃん『お？』

アラストール『やはり帰りたいか？』
シヤナ「ふん、帰りたいければ帰ればいいじゃない」
横島「シヤナ、俺が帰ったらやつぱり寂しいか？」
シヤナ「バ、バツカじゃない！寂しい訳ないでしょ、せいせいする
わよ／＼／」

心眼『安心せよ、このままお前達を見捨てて帰るようなまねはこの男はせぬ』

サッチャン『あちゃー。またハズレや』

横島「そういう事、心配するな」

横島はそう笑いながらシャナの頭を撫でた。

シャナ「な、ななななななな／＼何してんのよアンタは／＼」

横島「照れない照れない」

シャナ「て、て、照れてなんて無いわよ／＼」

横島「真っ赤な顔をして言っても説得力無いぞ」

シャナ「うっ、うるさいうるさいうるさーい!!」

心眼『成長せぬ二人だな』

アラストール『まったく』

参考作品・「灼眼のシャナ」

キーちゃん『ザーーーーーー!!』（グラニュー糖）
サッチャン『ザーーーーーー!!』（黒糖）

キーちゃん『ま、まだ口の中が甘いです』
さっちゃん『ワイもや。今度は』

なな「ご主人さまー。お散歩行こ、お散歩」

横島「散歩？仕方ね な」

たまみ「えー。ご主人さまはたまみとお昼寝するんだよ」

くるみ「違うの！くるみとおやつを食べるの！」

みか「おこちゃまは黙ってなさい。ご主人様はー、私とー、ラブラブにー…」

あかね「みーかー姉 さーん」

みか「ひいっ！わかった、わかったわよ。だから狩猟本能よみがえらさないで」

横島「こらこら、みんな仲良くしろよ」

るる「るるたちはみんな、なかよしらおもも」

つばさ「ボクたちはご主人様の守護天使なんだよ」

みどり「みんなご主人様が大好きなのねす」

らん「この気持ちは何時までも変わることはありません」

あゆみ「そう。12人いても気持ちは一つ」

ゆき「ご主人様がご主人様であるかぎり」

12人『この身に代えてもお守りします!!』
横島「みんな、ありがとな」

参考作品・「天使のしっぽ」

サっちゃん『ええ話や』

キーちゃん『でも此処も違うようですね』

キーちゃん『お願いします。今度こそ』

サっちゃん『ホンマええかげんにしてほしいわ』

ラル「タダたん急いで!“ノイズ”が逃げちゃうよ!」
忠緒「だって、あの格好恥ずかしいよ」

ラル「そんなこと言ってる場合じゃないだろ。住宅街に入られたらどんな被害が出るか」

忠緒「だって／＼／＼」

『オコジヨの姿をした使い魔ラルは母親の妹「横島小百合」（叔母と呼ぶと命が碎かれる）から魔法少女の力を受け継いだ「横島忠緒」と共に世界の調和を乱そうとする存在“ノイズ”を倒す為に日夜闘い続けているのだ。』

忠緒「誰に説明してるんだよ」

ラル「お約束ってヤツだよタダたん」

忠緒「タダたんって言うなー！」

ラル「でも真面目な話、被害が出てからじゃ遅いよ」

忠緒「わかったよ」

ラル「それでこそタダたんだ。さあ、“意味在る言葉”を」
忠緒「やればいいんだろ、やれば！『昼と夜とを紡ぐ朱^{あか}』」

そう唱えると忠緒の服は光になって上の部分から徐々に消えていく。

ラル「うほー」

忠緒「こらー！見るなー！！／＼」

ラル「そんな！タダたんは僕に死ねって言うのかい？」

忠緒「死ね！！#」

ラル「駄目だよタダたん。男の娘がそんな乱暴な言葉を使っちゃ」

忠緒「何時か絶対死なす！！」

そうこう言っていると忠緒の服は全部消えて今度は足の方から魔法少女のコスチュームに変わっていく。

白スクミtainなボディースーツにメイド風味の入ったセーラー服、ミニスカートにハイソックスの絶対領域、長い黒髪は右側8と左側

2のアンバランスなツインテール（だが、それがいい）靴は膝まであるブーツ、魔法少女タダオキュートの誕生である。

ラル「今日の変身も堪能させていただきました」

忠緒「ううゝゝ／＼／」

その顔は真っ赤に染まり、目尻には涙か浮かんでいた。

参考作品・「おと×まほ」

キーちゃん『ぐはあっ!!』（鼻血）

サっちゃん『ぶはあっ!!』（鼻血）

サっちゃん『乱ひゃん』（鼻に栓をしている）

乱「何だ？」

キーちゃん『楽ひいれふか？』（同じく）

乱「すっごく」

終わるぞ

キーさんとサッチャんの横島探索日記1（後書き）

注・最後のネタで横島の名前が忠夫では無く忠緒なのは男の娘という設定なのでそれらしく変えてみたわけです。

あくまでもネタなのできついツッコミは無しの方角でお願いしたいです。

キーさんとサッチャんの横島探索日記2（前書き）

前回同様にあくまでもネタという方向で。

キーさんとサっちゃんの横島探索日記2

サっちゃん『さて、今回も頑張りまひよか』

キーさん『そうですね、急ぎましょう』

サっちゃん『慌てず、急いで、正確にな』

キーさん『何処の技師長ですか』

横島「銀ちゃん、ゴメン。遅くなったな」

銀一「ホンマや。遅いで、横っち」

バッグを抱えながら横島は、走って来た。

横島と銀一、二人は小学六年生でクラスメイトである。

今日は映画を見る約束をしていて少し、横島が遅れたらしい。

銀一「お、間にあったな。横っち、早よせんと始まってまうで」

横島「分かっとなるって。え〜と、小学生は……あつ、今日はレディースデーか」

銀一「…ちよつと待て、横っち…まさか…」

横島「悪い銀ちゃん、ちよつと待っててな」

そう言い横島は駆けて行った。

銀一「はあ……」

銀一は重いため息をついた。そして数分後。

横島「お待たせ〜」

銀一「…やっぱりか……」

そこにいたのは、さっきまでの衣装に若干の変化を持たせ、長い黒髪ウィッグを付け、スカートを穿き、何処から見ても絶世の美少女になった横島であった。

『きゅん、何あの子？可愛い〜』 『モデルかしら？』 『お人形さんみたい』

横島「さ、早く行こ。銀ちゃん」

横島はウキウキ顔で会計を済ます。

銀一「横っち、お前な〜」

横島「だって、今日はレディースデーだもん」

そう、彼はその女顔を活かし、レディースデーなどは女装をしていたのだ。

参考作品・「少女少年？」

キーちゃん『……………』

サッチャン『…しよっぱなからコレかい』

サっちゃん『さてと、お次は…』
キーちゃん『どうでしょう』

沙羅「忠夫！何時までもだらない格好してないで着替えて来なさいよ。今日は久しぶりの依頼者が来る日なんだからね！！」

横島「分かったよ」

双樹「はい忠夫、着替えだよ」

俺は横島忠夫21歳、GSだ。ようやく美神さんから独立して今は自分の事務所を持っている。そんな俺の元に助手として押しかけて来たのが白鐘沙羅と白鐘双樹の双子の姉妹。俺なんかの何処がいいのか住み込みで俺の世話をしてくれている。

双樹「さあ早く着替えて。て、手伝ってあげるから／＼」

沙羅「あゝゝ！！双樹、何抜け駆けしてるのよ！！どきなさい、着替えの手伝いは私がするから」

双樹「ず、ずるいよ沙羅ちゃん。私がするの！！」

横島「お、おい、二人とも…」

二人とも着替えをさせる立場を取り合っているがこの狭い場所でも

み合つと…

沙羅「うわっ！」

双樹「きゃっ！」

横島「どわっ！」

言わんこつちやない。もみ合いになって三人まとめて倒れ込んだ。
そして其処に。

秋月「お早う御座います！GS協会から参りました秋月と申します。
今日は文珠使いである横島先生に是非ともお受けしていただきたい
依頼が……はあぁっ！！」

いきなりノックも無しにドアを開けて入って来た秋月という男は俺
達を見て啞然としていた。それはそうだろう、絡み合っている今の
俺達を第三者の目から見たら……

秋月「こ、之は男一人、女二人による多人数プレイ！いわゆる『3
P』！あ、ああ、何という事だ、何という事だ、重要な依頼を受
けてもらおうとした男がまさかこんな異常性癖の持ち主だったとは。
中学生相手に信じられん。俺なら断然巨乳の女、映画女優というな
らイベル・アヤーが いいのに。しかし、この男以外にあの霊
症を解決できないのもまたたしか。俺はあえて社会道徳をかなぐり
捨てて見て見ぬふりをしなければ……ゴクンッ」

（心象風景）《（あけて、あけてよ）夜中、電話ボックスの中
で泣きながら開かないドアを叩く秋月少年》

沙羅と双樹は秋月がブツブツと独り言を言っている間に横島から離
れてその横に座っていた。

秋月「そう。之は『超法規的措置』。俺は霊症事件の解決の為に不幸な二人の少女の人生をあえて、あえて見て見ぬふりをするのだ。ああ、最低だ最低だ。俺はなんて最低なGS協会職員だ。故郷の母親よ、別れた女房よ、女房の実家に引き取られた愛しき愛娘よ、この秋月郁の魂の選択を笑わば笑え……………見なかった事にしよう。（ワハハハハハハハハハハハハハハハハッ）と、いう事で横島先生」

さつきまでの苦悩もなんのその、笑顔で話を続ける秋月。

沙羅「……大丈夫かコイツ？」

横島「さあ？」

双樹「え、と……続き、する？／／／」

横島「何のだ!!」

参考作品・「フタコイ・オルタナティブ」 「BPS」

「さっちゃん、何や、ツッコみどころ満載やな」

「キーちゃん、そうですね。」

サっちゃん『さて、お次は』
キーやん『期待は出来ませんね』

一刀「白蓮！」

白蓮「よお！北郷じゃないか」

愛紗「お久しぶりですね」

鈴々「久しぶりなのだ！！」

此処は反董卓連合が集まっている場所、一刀達はようやく連合に合流したのだ。

白蓮「どうだ、琢県の様子は？」

朱里「はい、今は糜竺さんと糜芳さんの姉妹に任せてあります」

白蓮「北郷達が留守を任せるとはかなりの腕前なのか？」

朱里「ええ、武の方もそれなりにありますし、政の方もそれなりに信頼できますし、まあ、それなりに大丈夫かと」

白蓮「…本当に信頼してるのか？」

其処に新たな軍勢がやって来た。

愛紗「今度は何処の軍でしょう？」

白蓮「旗印は…劉に横か。桃香と横島か」

一刀「劉だつて！！白蓮、もしかして劉備か？」

白蓮「ああ、知っているのなら話は早いな。驚くなよ、あそこにも天の御遣いが居るんだぞ」

愛紗「そんな！！ご主人様以外に御遣いが居る訳が…」

朱里「でも、たしかに管輅の占いには御使いは二人いるとの件が」
鈴々「うにゃ。会ってみれば分かるのだ」

一刀「そ、そうだな…（まさか本当に劉備が居るとはな。もしかしてとんでもない事をしちまったんじゃない）」

そして、桃色の髪をした女の娘とこの時代には無い筈のGジャンとGパンに赤いバンダナをした男、朱里によく似た格好をした紫色の髪の小柄な少女がやって来た。

桃香「白蓮ちゃ〜ん！！元氣だった〜！！？」

横島「久しぶりだな白蓮」

雛里「久しぶりでしゅ」

白蓮「お前達も元氣そうだな」

朱里はその小柄な少女を見ると。

朱里「ひ、雛里ちゃーん！！」

雛里「え？…しゅ、朱里ちゃ〜ん！！」

二人は泣きながら駆け寄り抱き合った。

朱里「雛里ちゃ〜ん、会いたかったよ〜」

雛里「ひ、酷いよ朱里ちゃん、黙っていなくなるんだもん〜」

白蓮「何だ、二人とも知り合いだったのか」

桃香は一刀に近づいて話しかける。

桃香「貴方が琢県の県令様でもう一人の御使い様ですね。初めまして、私は名を劉備、字を玄德と申します」

横島「俺は横島忠夫だ。よろしくな」

一刀「あ、ああ。俺は北郷一刀、よ、よろしく」

愛紗「私は関羽雲長。ご主人様一の忠臣だ」

鈴々「鈴々は張飛なのだ!!」

一刀は桃香を呆然とした表情で見つめていた。

一刀（この娘が劉備玄德。愛紗と鈴々の本当の主だったかも知れない娘…）

すると其処に。

星「おやおや。北郷殿はさっそく桃香様に手をかけようとなさっておいでか？」

一刀「えっ、いや、そんな事は……せ、星!!」

星「久しぶりですな、北郷殿」

白蓮「なんだ、星。結局横島の所に行ったのか」

星「ええ。桃香様の理想に感銘を受けたし、何より主が面白……」

げふんげふん、主は忠誠を誓うに相応しい人物でしたからな」

横島「今、本音が漏れていたぞ」

星「これは心外な。まさか我が忠誠が疑われようとは」

横島「はいはい」

そんな光景を見て一刀は。

一刀（五虎將軍の一人の星が劉備の所にいるのか。なら少しは安心かな）

そんな想いをはせていた。すると、

桃香「あ、あの、北郷さん」

一刀「は、はい。何でしょう?」

桃香「さっき、星ちゃんが言ってた事なんですけど…わ、私にはご主人様が居るのですみません!」

桃香はそう叫び、横島の腕を掴んで頭を下げた。だが一刀は顔を青くして震えていた。何故ならば……

愛紗「ご主人様……」

一刀「は、はいっ!!」

愛紗「少しお話があります。此方へ……」

一刀「そ、そうだな。話をしような、話を。…だから話には偃月刀はいらないよな?」

愛紗「いいから来て下さい」

一刀「……はい……」

横島「…大丈夫かアイツ?」

朱里「はわわっ! た、多分……」

雛里「あわわっ! ほ、本当に?」

その後、陣の隅々まで悲鳴が響いたとか……

参考作品・「恋姫＋無双」「真・恋姫＋無双」

サっちゃん『今回もやりたい放題やったな』

終わります。

聖闘士星矢〜最終聖戦の戦士達〜（前書き）

……黙して語らず。

書いた事を反省はしてるが後悔はしていない。

聖闘士星矢〜最終聖戦の戦士達〜

此処はギリシャ聖域のアテナ神殿。

首を落とされたアテナ像の前で今世のアテナ、木戸沙織は泣き崩れていた。

『久しぶりだなアテナよ』

其処に現れたのは黄金聖闘士をいとも簡単に倒した聖魔天使と名の四人の男達。そして……

「……貴方は……ルシファー……!」

「何だって……! 氷河、ルシファーと言えば」

「ああ、かつては神に仕える大天使でありながら神以上の存在になるうとして魔界に堕とされた堕天使ルシファー、またの名を悪魔王サタン」

星矢、氷河、瞬はルシファー達に対して構えを取るが聖魔天使達は相手にする価値もないという様に一瞥しただけだった。

「貴方の目的は何なのですか、ルシファー」

「当然この地上とアテナ、貴女の命だ」

「そんな事はさせるか……! くらえ、ペガサス流星け……」

「この、無礼者……!」

ルシファーに攻撃を仕掛ける星矢達だったが聖魔天使達に一瞬のうちに倒されてしまう。

「星矢！氷河……瞬」

沙織は倒れた星矢に駆け寄る。

「愚か者めが。俺達は何の苦もなく倒した黄金聖闘士、それより劣る最下級の青銅の貴様達に一体何が出来るというのだ」

「く、くそうっ！！」

ルシファアはそんな星矢達を一瞥すると沙織に語りかける。

「アテナよ、これで分かっただろう。もはやこの地上に貴女を守る聖闘士は居ない、無駄なあがきはせずに大人しく我が軍門に降るがいい」

「何を…俺達はまだ戦えるぜ」

「そうとも！」

「アテナを、この地上を守る為に僕達が諦める訳にはいかない！！」

そう言いながら星矢達は小宇宙を高めながら立ちあがる。

「フツ、ならば今にも消えそうなの命の灯、今度こそ跡形もなく消し飛ばしてくれる！！」

「止めなさい、星矢！氷河！瞬！その体では…」

星矢達と聖魔天使達がぶつかり合うその瞬間。
辺りを強大な小宇宙がおおった。

「な、何だこの強大な小宇宙は！？」

「邪悪な感じはしないけど」

「ルシファール様、この小宇宙は一体？」

「この小宇宙……まさか……」

そして、其処に小宇宙の主が現れた。

『こんな所で何をしてるんですか？サつちゃん』

『何や、やっぱりキーやんやないけー!!』

その瞬間、辺り一帯の時間は凍りついた。

『横島さんの居場所が幾つか特定できました。さあ、行きますよ』
『そうか、今度こそ見つかると思えな。あ、ちよつと待ってや』

ルシ…… もとい、サッチャンは沙織達の所に来ると話しかける。

『アテちゃん、フー訳で用事が出来たから今回の聖戦は此处でお開きにさせてもらうで。ハーちゃんにもあんじょうよろしゅうに言っ
といてや。ほなさいなら』

そう言い残し、サッチャンはキーやんと共に何所かへと消えて行っ
た。

後に残されたのは事情をまったく理解できずに茫然とする沙織と星
矢達、そしてあまりの出来事に石化している聖魔天使達だけだった

……

と、言う訳で横島探索日記3に続く。

聖闘士星矢〜最終聖戦の戦士達〜（後書き）

……と言っ訳だ。

キーさんとサッチャんの横島探索日記3（前書き）

で、こっちが本命。

キーちゃんとサっちゃんの横島探索日記3

注・一応聖闘士聖矢　→最終聖戦の戦士達？→の続きとなっております。
ます。

『まったく、何をしてたんですか貴方は』

『しゃーないやんけ、この所更新が無くて暇やったんや』
『とにかく、今回はこの世界からです』

パシャッパシャッパシャッ

二人の少女？は幾つものフラッシュの中に居た。

カメラマンA「NATUKOちゃん、もうちょっとにっこりしてくれるかな？」

夏子「え？…え、と……」

忠夫「夏子ばつかななくてウチもちゃんと撮ってな！」

パシャッパシャッパシャッ

ワイ、横島忠夫は小学6年生でれっきとした男の子や。「娘」やない、「子」やで！

夏子、彼女はワイのクラスメイトで今をときめくアイドル、忍ちゃんの妹や。

そのワイらが何でこの状況に居るかというとな、これには深い訳があるねん。

実は夏子の父ちゃんが夏子をアイドルデビューさせようとしたんやけど夏子はそれを嫌がったんや、何度抗議しても聞いてはもらえなかったらしい。

そこでワイは考えたんや、ワイと二人でデュオとしてデビューして人氣が最高潮に達した時にワイが男やつちゅー事をばらして全てを台無しにしようつちゅー作戦や。

何？女と男のデュオでそんなに人氣が出るのかやと。

……言いたくないけどな、ワイは少し女顔やねん。カツラかぶってスカート穿いたらもう何処から見ても女にしか見えんらしい。…何や、笑いたければ笑えや！！

パシャッパシャッパシャッ

カメラマンB「TADAOちゃん、そんな難しい顔してないで笑って笑って」

忠夫「えっ？あ、はっい。綺麗に撮ってな」ニコリッ

夏子「アホ……あんがとな、横島……」

小さな声でそう呟く夏子の頬は赤く染まっていた。

カメラマンA「じゃあ、最後に二人で決めポーズを」

二人『はっい』

夏子「NATUKOと」

忠夫「TADA Oで」

二人は腕を組んで決めポーズを決める。

『二人はna - da!!』

翌日、アイドルデビューの記事が載った新聞を見ながらクラスは湧いていた。

銀一「わはははははははっ！こ、このTADA Oって間違いなく横
つちな」

男子A「知らん奴が見たら何処から見ても美少女や」

横島「……そーや、ワイや。悪かったな」

女子A「悔しい〜。ウチらよか横島の方がずっと綺麗やないか」

女子B「自信無くすわ〜」

横島「ええな！絶対にばらすんやないぞ！」

銀一「当然や！こないなおもろい事邪魔できるかい」

女子C「でもこれで夏子と横島は急接近やな」

夏子「えっ？そ、そんな事は…無いやろ…」

女子D「何ゆーてんねん！明らかに夏子の為やないか！」

女子C「あゝあ、結局横島をゲットしたのは夏子か」

サっちゃん『またコレかい』

っていた。

悟空「忠夫、やっとおめえと闘えるな。一度おめえと本気で闘いたかったんだ。オラ、ワクワクすつぞー！」

忠夫「ワイは全然ワクワクせんわー！いつ！こんな事やったら序盤でさっさと負けとくんやったー！！」

忠夫は涙を流しながら喚き散らすがもはや後の祭りであつた。

大界王「じゃあ悟空ちゃんに忠夫ちゃん。お互いに頑張つて頂戴」

そして、試合開始の合図が鳴る。

悟空「まずはオラから行くぞ！かめ、はめ、波ー！！」

悟空の手から放たれたかめはめ波は一直線に忠夫に向かうが、

忠夫「どわー！！サ、サイキック・シールド！！」

大界王星での修行で強化されたサイキック・ソーサーは全身を隠すほどの大きさになり、なおかつかめはめ波の直撃を受けてもビクともしなかった。

忠夫「い、いきなり何すんじゃー！いつ、死ぬかと思ったやないかー！！」

悟空「さすがだな、忠夫。じゃあ、本気で行くぞ！！はあー！！」

悟空の全身から噴き出したオーラは金色に輝きだした。髪も逆立ち、筋肉も膨れ上がりその体は一回り大きくなる。目つきは鋭くなり、

黒目も緑色になる。そして黒髪も金色になり悟空は超サイヤ人への変身を遂げる。

悟空「さあ、始めるぞ忠夫!!」

忠夫「始めんでいいわーいつ!!」

その瞬間、悟空の体は消えた。いや、あまりの超スピードの為消えたように見えるのだ。

忠夫「やられてたまるかい!!文珠ー!!」

忠夫は文珠を三つ取り出し【超】【加】【速】と込める。

韋駄天の技であるこの加速は、周りの時間を遅くさせる事によって超スピードを得るのである。だが……

悟空「おっ?忠夫、おめえも結構早く動けるんだな」

忠夫「何で遅くなった時間の中で普通に動いとるんじゃおのれはー
ー!!」

元から超スピードで動く悟空にはあまり関係がなかったらしい。

キーちゃん「此処の横島さんもどうやら違うようですね」

サッチちゃん「そのようやな、じゃあ他の場所に行くか」

キーちゃん「ちよつと待って下さい。あの観客席に居るのはこの世界の私達みたいですよ」

サッチちゃん「なんやて?」

観客席の中では……

キーちゃん『横島さん、頑張ってください!!』

サッチちゃん『横っち、負けるんやないで。ワイらは横っちが勝つ方に賭とるんやからな!!』

その声を聞いた横島は、文珠を取り出し発動させ、悟空を【模】倣した。

悟空「なっ!? オラになるなんてずっけえぞ、忠夫!!」

忠夫「はああああ……!!」

横島はすぐさま超サイヤ人になると気を高め出した。

忠夫「か、め、は、め、波……!!」

忠夫が撃ち出したかめはめ波は一直線に悟空……

……の横をすり抜けて、観客席の二柱に飛んでいく。

二柱『あれ?』

ドゴオオオ……ンッ!!

二柱『ギヤアアア……!!』

レポーター「おーとっ、悟空選手がかわしたかめはめ波の流れ弾に不幸な観客が巻き込まれてしまいました。皆さまもどうかご注意ください」

キーヤン『……あれは狙いが外れたんじゃない？ちりとこの世界の私達に狙いを定めてましたね……』

サッチヤン『その様な……あれ？……なあ、キーヤン』

キーヤン『何ですか？』

サッチヤン『あの横つち、こつちを見とるみたいなんやけど……』

キーヤン『ははは、まさ……か』

横島『はあああ……！』

横島はさらに気を高め、超サイヤ人3への変身を遂げる。

悟空『なっ！？おめえ、超サイヤ人3にもなれるんか！』

そして横島は上空に向かって全力のかめはめ波を撃つ。

サッチヤン『ああ、エネルギー波がこつちに来るなあ』

キーヤン『来ますねえ』

ドゴオオオオオ……ンッ！！

二柱『ギヤアアア……！！』

サっちゃん『え、えらい目にあつたわ』

キーちゃん『魂の牢獄がなかったら消滅してましたね』

参考作品「ドラゴンボール」

キーちゃん『それでは、次は……』

サっちゃん『当たり前、出てくれや』

その世界は暗雲に囲まれ雷鳴が轟いていた。

三つの塔で出来ているクリスタルの城の中で横島と三人の少女は向かい合つて話をしていた。

その内の赤い髪で長いお下げをしている少女は横島に泣きながら抱きついた。

横島「光……」

横島は抱きついて来た少女、光を優しく抱き止めその頭を撫でる。

光「そ、そんな……そんなの酷いよ、こんなのってないよーっ

！……何で、何で忠夫が柱なんだよ、私は嫌だよー！！」

海「そうよ、何で横島さんが柱なんかならなきゃいけないのよ！

」

風「私も納得できませんわ、何で横島さんばかりがこの様な目に……」

……」

横島「海、風……」

胸の中で泣きじゃくる光の頭を撫でながら横島は語りかける。

横島「心配するな、何とかなる!!」

風「何とかなるって……どうするつもりなんですか？」

横島「忘れたのか、俺は不可能を可能にする男! ワイルドジョーカ
ーなんだぞ。セフィーロの一つや二つ、柱なんかにならずに救って
やるさ。そして……」

泣きながら見上げて来る光に優しく微笑むと話しかける。

横島「光達と一緒に地球に帰るって約束したしな」

光「うんっ! 約束したよね。忠夫は約束した事はきちんと守ってく
れるもん」

ようやく笑顔になった光は横島の胸にじゃれつく様に頬を擦りつけ
る。

海「そうよね、横島さんなら何とかしてくれるわよね」

風「ええ、その為にもまずはデボネアを倒さなくては」

海と風の瞳からも涙は消え、輝きが戻って来た。

横島「それに……」

光「それに、何? 忠夫」

横島の呟きに光は小首を傾げる。

横島「地球には美神さんやおキヌちゃん、冥子ちゃんに魔鈴さん。
小竜姫さま、エミさん、ワルキューレ、小鳩ちゃん達が待ってるん
じゃー! 帰らずにいられるかー!」

だあああああー! っ!!

それまでのシリ阿斯を吹き飛ばす横島のセリフを聞いた海と風、そして立ち聞きしていたクレフ達も全員ずっこけていた。

海「よ、横島さん、あなたねー!」

風「ま、まあ、これでこそ横島さんと言つべきなのでしょうが……」

クレフ（まったく、あの男は）

フェリオ（はははは、まあ、風の言つとおりあれでこそ横島さ。俺達は横島と光達、マジックナイトを信じるまでさ）
ブレセア（そうですね）

そんな中、光は……

光「ぶ~~~~~!!」

涙目で頬を膨らませた顔を真つ赤にしていた。

横島「お、おい……光?」

嫌な予感がした横島が光から離れようとしたが、

光「忠夫のバカーーーー!!」

光が一瞬早く横島の足を思いつきり踏みつけていた。

横島「いでえーーーーー!!!!!!」

海「あはははは、罰が当たったわね横島さん」

風「浮気はいけませんわよ」

モコナ「ぷうぷう」

横島「浮気って何やーーーー!」

キーちゃん『神魔人の証である封印具もないですしこの横島さんも違うようですね』

サッチャーン『でも、此処の横うちにも頑張っしてほしいな』

キーちゃん『ですね』

参考作品「魔法騎士レイアース」(アニメ版)

キーちゃん『さて、此処はどうでしょう?』

サッチャーン『なんやこの世界は色々と混ざり合っているようやな』

モビィ「おい忠夫、そろそろ行くぞ」

横島「分かった分かった」

モビィ「ヤクト、貴様も急げよ」

ヤクト「うるせえな、言われなくても分かっているよ」

此処は神天界、魔界、幻想界、未来界、精神界、そして人間界が一つになった融合世界フュージョニア、そこにある乙女学院である。彼ら三人は特別留学生として本来女子高であるこの乙女学院に通っているのだ。

モビィ「とにかく急ぐぞ、学園祭まであまり時間は無いんだ。早く出し物などを決めないと」

横島「今日はヤクトの家でいいんだな」

ヤクト「ああ、親父はモビィの家に行くと言ってたからな。あの二人がいる家じゃ落ち着いて話なんか出来ん!!」

モビィ「忌々しいがその意見には賛成だ」

ヤクト「歩いて帰るのもめんどくせえな。飛んで行くぞ」

そう言いヤクトは翼を広げて飛び去って行く。

モビィ「待たんかヤクト!…全く落ち着きのない奴だ。忠夫、私達も行くぞ」

モビィも白い翼を広げて飛び去って行く。

横島「気は進まないんだが……仕方ねえな」

横島はそう言いながら内なる魔力を解放する。するとその姿は女性の物となり、瞳は蒼色に染まり背中には薄緑色の二対の翼が現れ、同じように空へと飛んで行く。

ヤクト・ヤン・キー、彼は魔界の魔太子である。

その名の通りにヤンキー・ファッションに身を包み、背中には魔族の黒い翼を持っている。

モビィ・モ・ラール、彼は神天界の天太子である。

白を基調にした服に身を包み、その手には風紀委員の象徴として光の竹刀を持っている。

当然背中には白い翼があった。

横島忠夫、彼は純粋な人族だったが世界融合の際、神天界の波動と魔界の波動の影響を受けて神魔人とでも呼ぶ存在になった。

普段は普通の人間と変わりはないが魔力を解放するとまるで女神の様な姿になる。何故女性体になるのかは分からないままだが。

（実はこれもノストラダマスの仕業である。理由は面白そうだから）

ヤクトの家に着き、玄関に入ると。

綾女「遅かったでござるな、待ちくたびれたでござるよ」

モビィ「うわあっ!!」

ヤクト「あ、綾女。てめえ、何時の間に俺んちに入り込んでやがった!？」

綾女「勿論、何時の間にやらでござるよ」

天井から逆さまにぶら下がっているのは川端綾女。横島のクラスメイトで人族の忍者オタクの少女である。

横島「まあ、いつもの事だ。気にするだけ無駄というものだ」

綾女「忠夫殿、するーとは少し寂しいでござるよ」

綾女の眩きを無視して部屋の中に入ると其処には。

ラビア「あ、お帰り。遅かったね」

コユキ「お帰りなさいませ。お茶の準備をしますよ」

ジヨゼ「こら、忠夫！！あたしの馬のくせにご主人様を置いて帰るとは何事よ！！」

横島「……………やっぱりお前達も居たのか」

ラビア、亜人間で兎人の女の子。運動神経は抜群で走るのが大好き。人参を食べると運動能力は跳ね上がるが兎の姿になってしまうのが困りもの。

コユキ、魔族で雪女の女の子。だが実は雪女と人間のハーフ。その為か雪女でありながら寒さにはめっぽう弱く、自分が起こした吹雪で自分が凍えるという愉快な現象を起こす。

ジヨゼ、種族はSFで人形の女の子。小柄で普段は横島の頭に乗ったり胸ポケットに入ったりして横島を馬扱いしている。

ルーシー「私達に隠れて何か悪巧みでもしてるんじゃないの？」

アキ「ヤツくん……………私をのけものにするなんて。やっぱり私なんか死んだ方がいいんだ」

ルーシー「こ、こら、アキ！フグ鯨の毒なんて何処から持ち出して来たのよ！！ヤクト、アンタのせいよ、何とかしなさい！！」

ヤクト「何で俺のせいなんだ」

ルーシー、魔族の女の子だが、実は元神族。ある事件がきっかけで墮天してしまった過去がある。

アキ、神族の女の子。大天使であるが過去での事件のトラウマでその羽は小さく空を飛ぶ事も出来ない。ちよつとした事でもすぐに悪い方にとらえ、自殺しようとする悪い癖がある。

モビィ「学園祭の話し合いをしようとしたただけだ。悪巧みなどして
いない」

ラビア「だったら何でボク達にも相談してくれないのさ」

ジョゼ「水臭いのよ」

アキ「相談もしてくれないなんて…やっぱり私が悪いのね。死んで
お詫びするしか」

ルーシー「だから止めなさいって言うてるでしょーが!!」

そんな騒ぎの中、隣の部屋から何やら話し声が聞こえて来た。

魔王「天帝殿、余は貴女を愛してますぞ」

天帝「嬉しいですわ魔王様。勿論わたくしも魔王様を愛しています」

ヤクト「おい、モビィ……」

モビィ「……ま、まさか……」

ヤクトとモビィの二人は幽鬼の様に立ちあがるとゆっくりと隣の部
屋への襖を開く。

魔王「天帝殿!!」

天帝「魔王様!!」

ヒシッ

其処には抱き合うバカップルが居た。

モビイの母親で神界の王、天帝とヤクトの父親で魔界の王である魔王の二人だった。

横島達はそんな二人を優しい目で眺めていたがモビイとヤクトにはそんな目が痛すぎた。

モビイ「母上えーーーー!!」

ヤクト「親父いーーーー!!」

天帝「あら、モツくん。お帰りなさい」

魔王「おお、ヤクトよ。帰っていたか」

『何をやってるんじゃーーーー!!(ですかーーーー!!)』

魔王「何を何も、愛を確かめ合っているだけじゃないか」

天帝「そうよ、愛を育みあってるだけよ」

砂糖を吐きそうなアツアツぶりだが、此処に居る連中にはすでに体性が出来上がっている。

モビイ「全く、天帝ともあるうお方が……嘆かわしい」

ヤクト「親父のあの威厳は何処に逝っちまったんだ」

横島「二人共……いい加減に諦めたらどうだ？」

横島のそんな助言も二人の心には届かなかった。

魔王「天帝殿、今日の貴女は何時にも増して美しい」

天帝「魔王様、そんな貴方も昨日より今日、そして明日の貴方はずっと凛々しくなっていくのでしょうかね」

魔王「天帝殿!!」

天帝「魔王様!!」

ヒシッ

神界の王と魔界の王……

もはや二人は何処に出しても恥ずかしい最強のバカップルであった。

『ぎゃああああああああああああっ!!』

コロコロコロコロコロコロコロコロコロッ

キーヤン『目が、目があーーーー!!』

サっちゃん『見るんやなかったあーーーー!!』

コロコロコロコロコロコロコロコロコロッ

あまりの事に二柱は転げ回って苦しんでいた。

乱「わはははははははははははっ!!」

コロコロコロコロコロコロコロコロコロッ

作者は作者で笑いながら転げまわっていた。

「さっちゃん、な、何ちゅー世界を考えるんやおのれは!!」

キーやん「私達を殺す気ですか!!」

乱「ふっ、甘いな。まだ続きがあるぞ」

「サっちゃん、何やて！？」

天帝「ねえ、モツくんにはヤツくん」
モビイ「何ですか母上……」
ヤクト「何だよ、天帝のおばさん」

天帝は自分のお腹を愛おしそうに撫でながら二人に聞く。

天帝「……弟と妹、どっちがいい？」

なっ！！！！！！！！！！

『ぎゃああああああああああああつー!ー!』

ကတိကဝတ်နိဗ္ဗာန်

[illegible]

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロッ

サっちゃん『お、鬼かいつおどれはっ！！』

参考作品「ハイスクール・オブ・ブリッツ」

終わりました。

横島と狐と茜雲（前書き）

少し思う所があってN i g h t T a l k e r から引っ越ししてきました。

あまりたいした書き足しはしてないですけどね。

横島と狐と茜雲

人間なんかキライだ。

自分達の都合だけで山を荒らす。

私達の住処を奪う。

私の……

私の母さんを……

母さんを殺した。

人間なんかキライだ………

「仕事っスか」

「ええ、簡単な除霊だからあんた一人でも大丈夫でしょ」

横島は美神から渡された書類に目を通している。

地方からの依頼で森の中で怪異が起こるという物だった。

「拙者も先生と一緒にいきたいでござるよ」

「あんたは私の仕事の荷物持ちよ」

「そんな〜、ひどいでござる…」

頂垂れて涙ぐむシロを尻目にタマモは笑顔で横島の方に歩いて行く。

「頑張つて来てねシロ。じゃあ私がヨコシマと…」

「あんたもこつちよ！！私達は私達で厄介な仕事があるだからね。

勿論、おキ又ちゃんもよ」

「は〜い…」

「ちっ！！」

美神が横島に任せた仕事は本来なら受けもしない様な低額なのだが美神は以前から母親の美智恵に横島の時給を上げると説教をされていた。

なのでこの様な低額の仕事を任せて給料upの代わりにしようという訳だ。

まあ、結局はピンハネをする事はするのだが…

そして美神達は自分たちの仕事場に、横島も自分の仕事場である山の中の小さな村へと行くのであった。

「横島と狐と茜雲」

横島視点

「幻覚に惑わされる？」

「へえ、山の中に山菜や薬草などを採りに入っても色々な幻覚で道に迷ってしまつて…酷い時など崖から落ちそうになつた事もありやす」

横島は依頼主の村人達から今回の怪異の事を聞いていた。

それによると数カ月前から森の中に入ると様々な幻覚が起こり、道に迷わされた揚句に元の場所に戻されてしまうとの事だ。

普通の村人たちはそれだけで済むのだが妖怪の仕業だろうと銃を持つて森に入る猟友会の人間や密漁者達などは先ほど説明された様に崖に誘い出したりなどと命に関わる様な出来事が頻発し、そこで最後の手段としてGSへの依頼となつた訳だ。

「うゝん、事情から察するに妖怪化した動物が動物霊の仕業みたいっすね」

「何とかかなりやすでしょうか？」

「とりあえずこれから森の中に入って調べてみます」

「大丈夫でですか？」

「まあ、それでもGSのはしくれですからね。任せておいて下さい」

森の中に入った途端に村人達が言っていた様に幻覚に襲われ「見鬼くん」で辺りを捜してみるが強い霊波によって「見鬼くん」は狂わされ人形の部分はグルグル回るだけで役には立たなかった。

仕方なしに文珠に【搜】と込めて発動させて霊波の出所を捜す事にした。

どうやらあちらこちらに動きまわっている様で中々居所を特定できないが、その事は同時に俺の考えた通りだった事がはっきりした。

「幻術を使うつて事は妖狐か妖狸といった所だな。銃を持った人間に殺意を持っている所から家族を殺されてその恨みから妖怪化したつて所か……。まったく、此処は禁漁区だっていうのに」

横島はこんな時にはその考え方は大抵、妖^{あやかし}寄りになる。それはかつての猫又の親子、ミイとケイ、そして最近ではタマモとの事からも明らかである。

食べる為に動物を殺す、その事自体には何の疑問も持たないし割り切っても居る。

だが、楽しむ為の狩り、娯楽の為に動物を殺すという事にはどうしても納得はいかない。

そうこうしている内に相手の動きが止まった、其処に妖怪を縛り付けている何かがある様だ。

「グウウウウウウウ~~~~」

叢の中から唸り声が聞こえる、草をかき分けて中を覗くと其処には殺されてから数カ月たっていて所々白骨化し、腐臭を放っている狐

の死骸があり、その前にはその死骸を守る様に子狐が牙を剥きながら俺を睨みつけていた。

思った通り、銃で殺されたらしく頭には弾痕があった。死骸がそのままという事はおそらく他の動物を狙った流れ弾にでも当たったのだろう。

「くそっ！！何でこんな事を」

「ガアアッ！！」

「痛てっ！！」

せめて墓に埋めて供養してやろうと手を伸ばすが、子狐は叫びながら飛びかかって来て俺の腕に噛み付き、鋭い爪で傷つけて行く。

子狐視点

「ガウウウッ！！……ガウ？……」

「ゴメン、ゴメンな」

子狐はこれだけ暴れまわり傷つけてもされるがままの横島を見つめるとその頬に涙が流れているのに気が付いた。そして不思議に思った、『何故この男は謝っているのか』と。

「こんな風に大事な家族を殺されて悔しいだろうな」

そう言いながら男は不思議な力を放つ珠を取り出すと母さんの体に当てる。

何をする気だと再び襲いかかろうとするがその珠は突然光り出し母さんの体を包む。

すると、さっきまでその体から流れ出ていた鼻が曲がりそうな臭いが嘘の様に消え去って行った。

この時横島が使ったのは【浄】の文珠、これにより死骸の腐敗は止まり、腐臭も浄化され消え去ったのだ。

妖怪化し、憎しみに囚われていたとはいえ知恵を付けていた子狐は横島が母親の体に害を及ぼすのではなく弔ってくれるのだと気付き、横島から離れる。

「分かってくれたのか、ありがとな」

「キューーン」

横島は噛みついていた口を離し、少し離れて座った子狐の頭を軽く撫でてやると穴を掘り、母狐の死骸を穴の中に横たえ埋め戻し、粗末ながらも墓を作ってやると再び【浄】の文珠で辺りを浄化する。

子狐はその墓に手を合わせて黙祷していた横島に近づくと傷だらけの腕や頬を舐め始めると妖狐になった事でタマモやシロ同様にヒーリングの効果がある様でたちまち傷は癒えて行った。

「クーン」

舐め終わると子狐は甘える様に横島に頬を擦り寄せる、どうやらす

すっかり懷いてしまった様だ。

「さてと、お前をどうするかだが……、連れて帰ったら美神さんは怒るやろな」

「コン？……！！ キュ~~~~ン、キュ~~~~ン」

おいて行くの？嫌だ、嫌だっ！！ もう一人ぼっちは嫌だ！！
もう悪い事はしないから連れて行ってよ！！

その言葉から此処において行かれると思ったのか子狐は横島にしがみ付き、離れようとしなかった。

「もう人を襲う心配は無いだろうけどこのまま此処において行くと他のGSに退治されそうだしな。……仕方ない、一緒に来るか？」

「コー~~~~ンッ」

横島と一緒に来るかと誘うと子狐は大喜びで飛びつき、横島はやれやれといった感じで子狐を抱き抱えると依頼主の村長の家へと歩いて行く。

「で、その子狐が怪異の原因だと」

「はい。密漁者に母親を殺された憎しみから妖怪化し、山に入ってくる人間から母狐の体を護る為に幻覚で道に迷わせていたようです」
「何故そいつを退治しないんだ！？」

散々幻覚に翻弄されたらしい村人は妖狐を退治せずに連れて来た事に腹を立てているらしく怒鳴りながら聞く。

「もう反省して大人しくなってますし、もし此処で退治したりしたら更なる怨念で祟り神になってしまふ虞がありますから」

祟り神になる。そう言われた村長は顔を青ざめて慌てふためく。

「た、祟り神！？ それは困りますだ」

「安心して下さい。こいつは俺が責任を持って保護妖怪として面倒を見ますから」

「この山において行く訳じゃねえんですな？」

「はい、俺が連れて帰ります。ほら、散々迷惑かけたんだからな。

お前も謝るんだ」

「キュウ〜〜、コン」

横島に言われ素直に謝る子狐を見ると村人達も何も言えなくなった。幸いに死傷者も無く、怪異も無くなるという事でこれで良しとする事にした様だ。

その後、依頼料を受け取り東京に戻る為に横島は山道を歩きながら下っていた。

子狐は横島の頭に乗っかり、甘えるようにじゃれ付いている。

そんな彼らの頭上には空一面に夕焼けが広がっていて、ふと横島が気付くと子狐もまた見惚れる様に夕焼けの空を見上げていた。

「お前も夕焼けが好きなのか？」

「コンコン」

「そっか」

そんな空を見上げ、流れていく茜雲を眺めていると横島は何かを思い付いた。

「茜雲…茜…あかね…そうだ！アカネなんてどうだ？」

「コン？」

「お前の名前だよ。今日からお前の名前はアカネだ」

「コン……コーーんッ」

子狐もかなり気に入ったらしく頭から肩に降りると顔に抱きついてその頬をぺロぺロと舐めている。

「後は……美神さん、給料上げてくれないだろーな……」

そして翌日……

「横島クン……？」

「どうしたんです、その子狐は？」

「これは一体どういう事よヨコシマ、この浮気者――っ!!」
「女狐が…女狐が増えたでござる」

仕事を終え、事務所に帰って来た美神達が見たのはバツの悪そうな顔で笑っている横島と彼の膝の上でお揚げを食べているアカネであった。

美神にしばかれ、タマモに燃やされた後、横島は事情を説明した。

「つまり、妖怪化したその狐を助ける為に保護妖怪として連れ帰ったって訳ね」

「はい。その辺の処理は昨日帰ってから隊長に頼んで済ませてるっス」

「タマモちゃんの時といい、横島さんらしいですね」

美神はようやく事情を理解し、おキヌは改めて横島の優しさを再確認していた。

タマモとシロはと言つと……

「う~~~~~!!」

「がるるる~~~~!!」

「グウウウウ~~~~!!」

横島の膝に抱かれているアカネと睨み合っていた。

「う〜〜〜、ねえヨコシマ。私のお揚げは〜？」

「…悪い、タマモの分も買ってたんだが全部食われちゃった」

「そんな〜、う〜〜〜、私のお揚げえ〜〜。私のお揚げ、返せえー
ー！！！」

タマモがアカネに飛びかかろうとしたその瞬間、アカネの体から凄まじいほどの霊波が放たれ、そして。

「なっ！？」

「えっ！？」

「うっ！？」

「そ、そんな…アンタ…」

「そー言えば、一応妖狐だったんだよなお前」

横島の膝の上には人間形態に変化したアカネが居た。

セーラー服を基調としたワンピースを身に付け、その長い金髪はポニーテールと言うか、フォクシーテールに纏められていた。

「改めて初めまして、私の名前はアカネ」

「アカネ…ちゃんですか？」

「そうよ、ご主人様が付けてくれたの。いい名前でしょ」

「「「「……………」ご、ご主人様あーーーーーっ！？」「」「」

「なっ！！、お、お前何ちゅー呼び方を…」

「えー？だって私は保護妖怪なんでしょ？だったら私を保護する貴

方は私のご主人様じゃない」

「理屈はそうだろうけど、さすがにご主人様はやバいと言うか何と
言うか」

アカネは上目遣いで見上げながら横島の胸にの字を書きながら迫り、横島は慌てふためきながらも何とか撤回させようとする。何しろ見た目中学生のアカネにご主人様と呼ばれるのはあらゆる意味で危険すぎる。

「よ、横島クン、アンタ…」

「横島さん…」

「嫌アーーーーっ!! そんな目で見んといてーーーーっ!!
ワイはロリやないーーーーっ!!」

「拙者は認めぬでござるよ!! やり直しを要求するでござる!!」

「ヨコシマに助けられたのは私も同じよ、だったら私もヨコシマを
ご、ご、ご主人様って…/ / /」

「これ以上状況をややこしくするなーーーーっ!!」

「この馬鹿丁稚が…」

「横島さんの馬鹿…」

こうして美神除霊事務所に新たなる騒動の種が加わる事となったのである。

「ご主人様、だぁーい好き」

後に、１１人（匹）増える事になるがそれはまた別の物語である。

終れ！！

横島と狐と茜雲（後書き）

と、言う訳ですが今の所連載化する予定はありません。

殺生石から別の九尾が生まれるのではなく、妖怪化した狐と言う事でアカネのモデルは「天使のしっぽ」の狐のあかねでした。

守護天使にすると横島の過去の話が絡んで来るので読みきりでは難しかったのでこう言う設定にしてみました。

こうなると他の娘達の話も描いてみたくなったり。まあ、無理でしょうが。

さて、連載物も書かなくては。

「夕陽が照らす、部屋の中で」（前書き）

これはNight Talkerに投稿していた作品ですが、ちょっとだけ修正して此方に引越して来ました。

何時ものノリとは違い、横島死亡後の話となります。続きとなる唯緒ちゃんの話も同時に投稿します。

「夕陽が照らす、部屋の中で」

ヨコシマクンがシンダ……

カレはモウドコニモイナイ……

カレへのオモイはモウドカナイ……

そんなに強い魔族ではなかった……

ただ、狡猾だった……

劣勢と見るや人質を攻撃した……

人質は三人の子供……

横島クンはとつさに飛び出した……

止める隙もなかった……

二人を両手のサイキック・ソーサーで……

一人を自分が盾になって……

前の中級魔族との闘いで文珠を使い切っていたのが痛かった……

いや、それ以前に文珠に頼りすぎなければ……

彼はあの時から死を極端に恐れるようになった……

自分の死より他人の死を……

そして私達は結局彼の心も命も救えなかった……

頭に浮かぶのは後悔だけ……

笑顔ってなんだっけ……

あの時から私達の時間は止まったまま……

時々思い出したように冷たい涙が頬を流れるだけ……

ヨコシマクンがシンダ……

カレはモウドコニモイナイ……

カレへのオモイはモウトドカナイ……

「ヨコシマの両親？」

「ええ、明日此処に来るそうよ」

「…先生の葬儀にも出ずに、なぜ今頃……」

「横島さんのお母さんは出産直前だったの」

「横島クンを驚かせようとして隠してたらしいんだけど突然の訃報で倒れたらしいわ。」

それが原因でかなり危ない出産だったんだって」

「そうでござったか……」

「小竜姫とヒヤクメにパピリオ、そして老師も来るって連絡があったわ」

「……なんて言えばいいんでしょうね？……」

おキヌの疑問に答えられる者はいなかった。

なにも言えない、いや言う資格さえない、

どんなに怒られようが、どんなに詰られようが、

身を引き裂かれるような罵詈雑言さえも甘んじて受けるしかないのだから……

「私、お夕飯の買い物に行ってきます……」

「私も付き合うわ」

「……いつてらっしゃい……」

「ほい、おキヌちゃん、大根2本で三百万円だ！なんてな、はははは……はは……なあおキヌちゃん、無責任な言い方かもしれねえ

がいつまでも泣いてたって何にもならないただ辛さが増すだけじゃないのかな？いきなり笑えとは言わねえが少しは前を向かねえと……」

「そうだよ、それに病は氣からというしこのままじゃ本当に病氣になっちゃうよ、そうなたらあのお兄ちゃんだって心配するよ？」

「……よ、横島さん？……」

「お、おい！かあちゃん、あの兄ちゃんの事は口にしちゃダメだつて！」

「あ、ゴ、ゴメンね、おキ又ちゃん？」

「ふ、ふええ……よこ、横島さん……ふええ、ふええ……ん！」

商店街から帰る途中、ふと空を見上げると真つ赤な夕陽が空を染めていた。

その赤い色を見ながらおキ又はかつて、横島が教えてくれた言葉を思い出していた。

「……昼と夜の一瞬の隙間……短い間だから余計に綺麗……」

「それって、ルシオラって女性の？」

「ええ、横島さんが本気で愛したただ一人の女性……」

「……どんな女ひとだったの？」

「最初は敵だった、横島さんを連れ去ってこき使ってたつて。でも、だんだんとその優しさに魅かれて、あとは私達と同じ、いつの間にか好きになってたんだつて」

「私は……別に……」

「日が暮れちゃう、急ぎましょう……」

「うん……」

「あ、おキ又ちゃんにタマモちゃん」

「…ピートさんに神父様……」

「横島くんのご両親が来られるらしいね、私達も行かせてもらつよ」

「それからワルキューレさんやジークさん。小竜姫様達も来ると連絡が来たよ、ぼくもタイガー達と一緒に行くから」

「…はい…」

事務所への帰り道、薄らいでいく夕焼けを横目で見ながらタマモは思いに更けていた。

何時からだろう？誰も笑わなくなったのは？

何時からだろう？涙が氷のように冷たくなったのは？

分かっている、きっとあの時から。

ヨコシマが消えたあの日から……

ヨコシマの傍は暖かった。

ヨコシマの周りではみんなが笑っていた。

だから私も何時の間にか自然に笑っていた。

……そっか、そうなんだ。いつの間にかなんだ……

いつの間にかヨコシマを……

冷たい涙が頬を流れた。

翌日、私達は事務所に集まっていた。

小竜姫様と老師様、ヒヤクメ様、パピリオちゃん、ベスパさん
ワルキューレさん、ジークさん、

神父様、ピートさん、タイガーさん、雪之丞さん、

エミさん、冥子さん、魔鈴さん、

小鳩ちゃん、貧乏神さん、愛子ちゃん、

カオスさん、マリアさん、西条さん、

そして美神隊長にひのめちゃん、ひのめちゃんは隊長に抱かれて眠っている。

『美神オーナー、横島さんのご両親が見えられました』

「そう、ここにお通しして」

『了解しました、…どうぞそのまま、この部屋です』

ガチャッ

「……」

横島さんのご両親が遂に来た、お母さんは女の子の赤ちゃんを抱いていた。

「この度は私達の力の無さで息子さんを…すみませんでした」

二人は険しい表情のまま私達を見つめている。

そしてお父さんが口を開いた。

「あいつの、忠夫の最後は…、最後はどうだったんですか？」

「はい、人質を取られて苦戦しましたがなんとか追い詰めることに成功しました、しかし相手は私達の隙を突いて人質の子供達を攻撃しました。横島ク…息子さんは子供達を守ろうとして自分を盾に…」

「……そうですか、私達より先に死んで親不孝者と怒るべきなのか人質の子供達を救った事をよくやったと褒めるべきなのか、私達はどうすれば……」

「褒めてやって下され！」

「シロ！」

「……君は？」

「拙者は横島先生の一番弟子の犬塚シロと申します」

最初の出会いは空腹に耐えかねて先生の食事を狙った時。

その時に見た霊波刀は見事でござった。

すぐに先生に弟子入りをして父上の仇を取ろうとした。

その後犬飼に返り討ちにあい大ケガをした拙者を美神殿と先生が霊波で治療してくれて目が覚めた時には超回復によって拙者の体は大人になっていたでござる。

その頃は先生の事は師匠でありどこことなく兄上といった感じであった。

でも、だんだんと自分が女なんだと自覚してくるとその気持ちが変わって来たのがわかった。

ああ、拙者は先生が好きなんでござるな。

しばらくの間修行のため人狼の里から出れなくなった。

あのアシュタロスの事件の時も里に妖共が襲って来て里を守るので精いっぱいのござった。先生のことは信じていたからあまり心配はしてなかったのござるよ。

美神殿の所にタマモと居候することになった時にも先生はいつもの通り元気であった。

いつも笑っていて……だから気付かなかったのござるよ……先生
の傷に……

「シロ……」

シロは泣いていた。私もいつの間にか泣いていた。

超感覚で私にも分かったのだ、シロが何を感じているのか。

ヨコシマのバカ……。

私達をこんな気持ちにさせといて、自分はさっさと居なくなって……

……

「ふあ……」

「あつ、まずい。ひのめが目を覚ました！」

「まずいって、その子がどうかしたの？」

百合子が不思議そうに訊ねてきた。

「ひのめは横島君に、息子さんに一番懐いてまして、目を覚ますとすぐに横島君の姿を捜すんです。そしていないとわかるといつも大泣きして……」

そう言っているとひのめはいつも通りに横島の姿を探し始めた。

そして、百合子が抱いている赤ん坊を見つめると。

「……ふあ、だああ」

「……！！ ひのめが笑った！？」

呆然としている皆をよそにひのめはその赤ん坊に手を伸ばして呼びかけた。

「にーに、にーに」

「……にーにつて……もしかして……この赤ちゃんって……横島クンの……」

「ヒヤクメツ！この赤ちゃんの霊視を」

「わかったの、やってみるの！」

赤ん坊の霊視をしていると、ヒヤクメの目からぼろぼろと涙が零れてきた。

「よ、横島さん…横島さんなの！…この赤ちゃん、横島さんの生まれ変わりなの！」

どこことなく虚ろだった皆の瞳にだんだんと光が戻ってきた。

「な、何だって！この子が…、この子が忠夫の生まれ変わりなんですか？」

「間違いないの、この子の霊波は横島さんのと全く一緒なの！！」

百合子は腕の中の赤ん坊を見つめながら…涙を流しながら語りかけた。

「そっか…忠夫、また私達の子供として帰って来てくれたんだね…」

「は、はははは…忠夫はおかしいだろ。この子は女の子なんだから…」

大樹も泣きながらそう言った。

「うっ、ふあぁ…」

「あら、お姫様はお目覚めのようね」

百合子の腕の中だ目を覚ました赤ん坊は令子達を一人一人見つめて、

「ふあっ」

そして微笑んだ。

「皆、抱いてみる？」

百合子はそう言ってまずは令子に抱かせた。

「横島クン…もうナンパは出来そうにないわね…」

次はおキヌに抱かせた。

「横島さん…今度は女の子だからお料理、教えてあげますね…」

次はシロに抱かせた。

「先生…今度は拙者が霊波刀を教えるでござるよ…」

次はタマモに抱かせた。

「ヨコシマ…もし、ヨコシマをいじめる奴がいたら今度は私が助けてあげるからね…」

それからは、小竜姫、老師、ヒヤクメ、パピリオ、ベスパ、ワルキユーレ、ジーク、唐巢、ピート、タイガー、雪之丞、エミ、冥子、魔鈴、小鳩、貧乏神、愛子、カオス、マリア、美智恵、と一人づつ抱いて声をかけて行つて西条の番になりいざ、彼が抱こうとすると。

「ふあゝあゝあ…むにやむにや…すゝ、すゝ」

と、美智恵の胸の中で再び眠りについてしまった。

そんな赤ん坊を見ながら西条が、

そんな彼らをはるか空の上から見つめている存在があった。

『皆、笑っていますね』

『ああ、横つちの魂を逆行させ再びあの両親の子供として転生させる。かなり強引な方法やったけど苦労した甲斐があるな』

『しかし、ルシオラの魂も横島さんの中にあるままですからこれからどうなるか』

『まあ、今度は横つち自身が産む事になるさかいあまり問題はないやろ』

『そうですね。しかし私達に出来るのはここまで、後は横島さんが今度こそ健やかな人生を送れる事を祈りましょう』

『せやな』

そして彼ら二柱は光と共に天へと消えて行った。

「すっ、すっ、」

「くうくうくうくう、」

百合子さんとママの腕の中で二人の赤ちゃんは寄り添うように眠っ

ている。

横島クンは死んだ。

彼はもういない。

彼への想いはもう届かない。

でも、新しい命を持って帰って来た。

新しい命でこれからの人生を共に生きて行く。

例え隣を歩けなくても同じ世界で生きて行ける。

夕陽が照らす部屋の中に笑い声が響く。

夕陽が照らす部屋の中で私達は笑顔を思いだした。

夕陽が照らす部屋の中で私達の時間は再び動き出した。

く完く

「夕陽が照らす、部屋の中で」（後書き）

と言う訳で書いてしまった横島死亡後の話。

実はこの話、僕が一番最初に思いついたGS美神のSSだったりする。

生まれ変わって来た彼女の名前は唯緒^{ただお}です。

…解ってます、何のひねりもないという事は解っています。

頭の中にはネギま！とのクロスに持っていく予定。（あくまでも予定、書くかどうかは未定）

では、この辺で。

「唯緒、はじめてのおつかい」(前書き)

横島が生まれ変わった唯緒^{ただお}ちゃんのお話。

自分で書いてて、てぽてぽする唯緒に密かに萌えていたのは君と僕だけの秘密、約束だ!!

「唯緒、はじめてのおつかい」

「じゃあ唯緒^{ただお}、お使いをお願いね」

「うん、いつてくゆね。おかあさん」

てぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼ

唯緒は可愛い足音を鳴らせ、腰まで伸びた長く艶やかな黒髪を揺らしながら商店街の方へと走って行く。

百合子は付いて行きたい衝動に駆られるがぐつと我慢した。これは唯緒の初めてのお使いなのだ、もし付いて行ったのがばれると暫くは口を聞いてくれないだろう。

実際に以前怒らせてしまった時は一週間もの間口を聞いてくれなかった、その時は余りの寂しさで唯緒の方から話しかけて来てくれるまでかなり老け込んでいたらしい。

「それにあんまり心配する必要もないのよね」

そう呟き、唯緒が道の角を曲がるのを見届けると家の中へと入って行く。

てぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼ

「えへへへ、おつかいおつかい、はじめてのおつかい」

横島唯緒、三歳。この少女は「魔神大戦」での英雄、横島忠夫が生まれ変わった姿である。

彼は魔族との闘いの際、不運の死を迎えたが最高指導者達の手によって少し時間をさかのぼった転生で再び横島夫妻の子供として新たな生を受けた。

「おや、唯緒ちゃん。お出かけかい？」

八百屋のおじさんが話しかけて来た。

「うん！唯緒ね、はじめてのおつかいな」

「そうかいそうかい、唯緒ちゃんはえらいね」

「えへへ、唯緒、えやいの。えっへん！」

誉められたのが嬉しいらしく、唯緒はその小さな胸を張る。

「じゃあ唯緒ちゃん。ウチの野菜も買って行ってくれないかい？唯緒ちゃんに『食べてほしいよ』って言うてるよ」

八百屋の親父はそう言いながら手に取った野菜を一つ唯緒に差し出す。……が。

「やゝゝゝ！タマネギ、きやいゝゝゝ！！」

唯緒はすぐに逃げ出した。

「はははは、タマネギが嫌いな所は変わらねえな」

走り去って行く唯緒を見つめながら親父は笑っていた。

その頃、町の上空に一つの影が漂っていた。

それは他の町で雑霊や低級霊を吸収して、今では下級魔族ほどの力を得た悪霊だった。その悪霊は力を求めていた、神にも匹敵するほどの力を得て世界に君臨したいと。

『足りない……まだ足りない。もっと、もっと力を……ん？』

そんな悪霊の視線の先には一人で歩いている唯緒がいた。

『あの小娘、かなりの力を持っているな。いいぞ、あの小娘に取り付けば生き返れる上になりのパワーアップが出来る。フッフフ、ハアーハッハッハッ！グウー！ッドアイミングウウー！……！』（c v・セルの中の人）

そして悪霊は唯緒に乗り移ろうと上空から舞い降りて来た。……が、

『浮幽霊・烈波あーっ！！』

『ぐはあっ！……！』

突然襲いかかって来た浮幽霊による多段アッパーに悪霊は吹き飛ばされる。

『な、何だいきなり！？』

『スーパァー・浮幽霊・キーーーークッ！！』

『がはあっ！……！』

今度は上空からの激しい蹴りが襲いかかる。

地面に叩き付けられるかと思った瞬間、何者かに掴まれる。

『貴様、今唯緒ちゃんに何をしようとした？』
『は？』

厳つい親父の幽霊が凍りつきそうな視線で悪霊を睨みつける。
そして…

『自縛霊・ブリッジッ！！』

肩の上に抱え込みギリギリと背骨を逆方向へと押し曲げていく。

『ぎゃああああー！！っ！！』

放り投げられ解放されたかと思っただのもつかの間。

『次は俺だ』

別の幽霊に両腕を掴まれ、ふとももの所を両足で固定され、そのまま両腕をひねり上げられる。

『自縛霊・スペシャル！！』

『がああああー！！っ！！』

『次は私に任せてもらおう』

老紳士の霊、彼の名は鷲五郎。孫の守護霊をしていたが余りの孫の粗忽さに愛想を尽かし今では自称唯緒の守護霊として彼女を影ながら護っている。

愛用のステッキを中段に構え、悪霊に向け一步を踏み出す。
悪霊は見た。その刹那、ステッキが九本に分かたれたのを。

『九守護霊・龍閃』

壱

捌 弐

漆 玖 参

陸 肆

伍

剣術の基本である九つの斬撃が全てが一瞬にして悪霊を襲う。

『ぎゃあああーっ！！』

『お次は私だ』

石神は悪霊を上空に放り投げるとマッスルな星の王家に伝わる三大奥義の一つを繰り出す。

『土地神・スパーク！！』

『ぐぎゃあああーっ！！』

悪霊は何が何だか分からなかった。

自分は力を得ていたはずだ。少なくともそこら辺に居る浮幽霊如きでは自分に触れる事すら出来ない筈なのに。

だが実際には触れるどころかもはや逆に滅ぼされる寸前である。

そう、悪霊は知らなかった。助けられてばかりで助ける事が出来なかった彼女の前世、忠夫の為に彼の生まれ変わりである唯緒を護ろうと街の住人だけでなく幽霊達も彼女を護っている事を。

其処に騒ぎを聞きつけたのか唯緒がやって来た。

「みんな、なにやってゆの？」

唯緒は可愛らしく小首を傾げながら聞いて来る。

彼女にとって彼等は自分と仲良くしてくれる友達であって、幽霊だからと言って怖がったりする事は無かった。

そんな唯緒を見て、幽霊達は途端にデレデレになる。

何の事は無い。前世がどうのこうのではなく、彼等はただ単に唯緒に萌え萌えなだけの様だ。

『何でも無いよ。皆でプロレスごっこをしてたんだ』

「そうなんだ。唯緒はねえ、はじめてのおつかいなんだよ」

『そうか、唯緒ちゃんはいんだね』

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチパチ

皆は顔を綻ばせながら拍手をし、悪霊も何故かつられて拍手していた。

「えへへへ／＼／／／」

唯緒は照れながら後ろ頭を掻くのであった。

『さ、急がないと。お母さんに怒られるよ』

「うん、いつてくゆね。ばいばい」

唯緒はその小さな手を振ると、可愛らしい足音を鳴らして走り去っていく。

てぽてぽてぽてぽてぽてぽてぽてぽてぽてぽてぽてぽてぽ

『ばいばい』

幽霊達はデレデレの表情で手を振っていたが彼女が見えなくなると途端に冷たい表情になり、

『さてと、そろそろ終わりにするか』

そう言いながら巨漢の幽霊が悪霊を掴むと、遙か上空へと放り投げる。

『浮幽霊・スカウティング・ボンバー!!』

『うわあああー！！ー！！』

『さあ、ジエームズ伝次郎。止めたよ!!』

『OK!! レッツ・ミュージック!!』

伝次郎はマイクを取ると、その歌声を悪霊に叩きつける。
ソリタリー・ウェーブ

『ガガ、ガン、ンガ、ガガ、ン、ガガ、ガガ、ガン

、ンガ、ガ、ガガ、ガーオーイー」

『ぐわああああああつー!』

悪霊の体は徐々にひび割れて行き、最後には

『ガー　ガー　ーガアー!』

巨大な金色のロボットの幻影が現れ、巨大なハンマーを振り下ろして来た。

『嫌アーーーーーッ!』

そして、悪霊はそのまま光になって消え去った。

『ちつくしよおおおおー!ーーーーーッ!』

空しい叫びを響かせながら……

『イエーイーッ!!サイコオーーだッズエ!』

『『『イエーイー!』』』

そう、百合子が安心して唯緒を送り出したのは彼等が唯緒を護っているからだ。

彼等の萌えパワーは上級神魔族にも匹敵する。

『これが勝利の鍵だ!!』

そして唯緒はようやく目的地の肉屋にたどり着き、店の中に入るとすぐに店の主人が出て来た。

「こんにちわー、おつかいにきたよ」

「いらつしゃい、唯緒ちゃん。何が欲しいのかな？」

「あのね、とりさん!!」

「ん、ここはお肉屋さんでペット屋さんじゃないんだよ。鳥さんはいないかな」

ちゃんと鶏肉を買いに来たという事は分かっているが少し意地悪気味に言ってみる。

すると案の定唯緒は少し困った顔になる。

「あのね、ちがうの。とりさんをかいにきたんじゃなくてね、えと、えと……そうだ、とりのおにくさん!!」

「そつか、鶏肉だね。じゃあ、鶏肉をいくつ欲しいのかな？」

「え、いくちゆ?……えと、んと。あ、そうだ!おかあさんにメモをかいてもらったんだった」

そう言うとポシェットからメモを取り出し内容を確認する。

「えとね、しゃんまるまる」

そう言いながら小さな手で三本指を立てると笑顔で突き出し千円札を差し出す。

「鶏肉を300gだね。よく言えました」

「唯緒、えやい？」

「うん、偉い偉い」

そう、肉屋の親父は笑顔で唯緒の頭を撫でてやり、鶏肉の入った袋を持たせお釣りをポシエットに入れてやる。

「えへへ、じゃあしゃよなや」

笑顔で手を振りながら唯緒は店を出て行き、扉が閉まると親父は店の奥に隠れていた妻に声をかける。

「首尾はどうだ？」

「勿論、完璧だよ」

店の奥から出て来た妻のその手にはビデオカメラが握られており、さっそくその映像を確認すると二人の鼻からは赤い液体が零れて来た。

「ああゝゝ、唯緒たん。何て可愛いんだい」

「さあ、何時までも萌えている場合じゃない。さっそくダビングして百合子さんに渡さなきゃ。そうすれば見返りに唯緒たんのお昼寝の姿を録画したDVDが貰える事になってるんだからね。急ぐんだよ、アンタ！！」

「合点だ！！」

何と言う事でしょう！百合子は家での唯緒の映像のDVDを取引に

使い、各方面での色々な唯緒の映像を手に入れていたのです。もっとも、公開できない（する気もない）秘蔵映像もあるのだが（例えて言うならおねしょをして涙ぐんでいる唯緒の映像とか）

てぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼ

唯緒が家に向かって歩いてしていると公園の中に見知った人物を見つけた。

「あつ、タマモおねえちゃ〜ん!〜!」

「あら、唯緒じゃない。どうしたの、一人？」

九尾の狐の転生体タマモ。彼女も唯緒の前世である横島忠夫に想いを寄せていた一人であり当然、生まれ変わりである唯緒の事も可愛くて仕方がない。

てぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼてぼ

「わ〜い」

ぽふっ

唯緒はタマモに駆け寄るとその足に抱きつく。

「ぐふっ!〜!」

タマモは自分の足に抱きつき、頬をスリスリと擦りつけて来る唯緒

に精神的な大ダメージを受ける。

「た、唯緒……？」

「タマモおねえちゃん、だっこ」

唯緒は満面の笑みで両手を差し出し抱っこをせがむ。

「ざぐれろっ！！」

かいしんのいちげき、タマモに一億のダメージ。

もう止めて、私のライフはもうゼロよ。でも止めないで。

唯緒は両親以外ではタマモに一番懐いている。

もつともその理由は赤ん坊時代に彼女のナインテールをおもちや代わりにしていた為という事はタマモの為に内緒にしておこう。

「タマモおねえちゃん、どうしたの？」

「な、何でもないわよ。そうか、抱っこだったわね」

何とか“川岸”から還って来たタマモはゆっくりと唯緒を抱き抱える。

「それより今日はどうしたの、百合子さんは一緒じゃないの？」

「きょうはね唯緒、はじめてのおつかいな。だからおかあさんはおうちであるすばなんだよ」

「そう、ちゃんとお使いが出来たんだね。じゃあご褒美にお姉ちゃんがアイスを御馳走してあげる」

「え、ほんと　あ、でもみちくさたべたらおかあさんにおこられちゃう」

「大丈夫よ、ちゃんと百合子さんにはお姉ちゃんが言ってあげるから」

「わーっ　いつ　」

それから唯緒はタマモの膝に座ってソフトクリームを舐め、タマモは鼻歌を歌いながら唯緒の長い髪を自分と同じナイトールにまとめていく。

そんな二人をシロは草むらに隠れ、血の涙を流しながら撮影していた。

「くっくっく、あの時グーさえ出さなければ……」

実はこれも百合子の依頼、百合子は唯緒の撮影を二人にも頼んでいてその為、どちらが遊び相手になってどちらが撮影係になるかをジャンケンで決め、勝ったのがタマモだったのだ。

「おいしかった、タマモおねえちゃんありがとう　」

アイスを食べ終えた唯緒はタマモに向き直りニッコリと笑顔を浮かべる。

「どういたしまして。さ、早く帰らないと百合子さんが心配するわ

よ

「うん、じゃあ唯緒かえゆね」

そう言い、ベンチの上に立つとタマモの頬を両手で掴みタマモが何かを言う前にその唇に自分の唇を重ねる。

「ちゅっ」

「……………!……………!」

「…………えへへ、しゃよなやのちゅっだよ／＼。じゃあ、タマモおねえちゃんまたね。ばいばーい」

てぽてぽてぽてぽてぽてぽてぽてぽてぽてぽてぽてぽてぽてぽてぽ

唯緒はベンチから飛び降りるとタマモに別れを告げて可愛い足音を鳴らして走り去って行く。

そんな中……

「こんのおーっ女狐えーっっ!!よくも先生の可憐な唇を奪いおつたなあーっっっっ!!」

我慢の限界を超えたシロは隠れていた草むらから飛び出し、号泣しながらタマモに詰め寄って行く。

彼女だけは何故か先生という呼び方を変えようとはしなかった、彼女曰く『先生はたとえ生まれ変わっても先生に変わりはござらん。将来、拙者が霊波刀の師匠になったとしてもこの呼び方だけは変え

るつもりはないでござるよ』との事だ。

「聞いておるのかタマモ!! 何とか言ったら……??…タマモ?」
肩をゆすつても反応が無いのでシロはタマモの顔を覗き込んで見る。
すると……

「!!…タ、タマモ……お、おぬしは……そうであったのか」

タマモは何処かのボクサーの様に真っ白に萌え尽きて逝た。(誤字にあらず)

「タマモ、おぬしは…おぬしは漢であったよ…さらばでござる!!」

シロはそう言いながら滝の様な涙を流し萌え尽きて逝るタマモに敬礼をした。

そんな時、何処からともなくゴングの音が聞こえて来たそうなの……

カーン、カーン、カーン、カーン、カーン、カーン……

てばてばてばてばてばてばてばてばてばてばてばてば

ふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさふさ

唯緒が走るとその足音と同時にタマモに結わえられた黒髪のナイン

テールが揺れる。

「ぐはあっ」

「な、なんという破壊力!!」

「ハアハア、唯緒タン」

「いかん!! コイツは危険だ、連れて逝け!!」

そんな風に唯緒が家に向かって走っていると、ある一組の親娘が唯緒に話しかけて来た。

「あら、唯緒ちゃんじゃない。どうしたの？」

「にーにー わーい、にーにだ」

唯緒をにーと呼びながら走り寄って来るこの少女は「美神ひのめ」。

美神美智恵の娘で唯緒より三カ月ほど年上である。（そう言う事にしといてください）

彼女は赤ん坊の時、忠夫が唯緒として生まれ変わって来た時、最初にそれに気付いた人物であり成長した今も唯緒の事をにーと呼び続けている。

「あ、美智恵おばちゃんとひのちゃんだ」

「にーに、ひのとあそぼ」

「うーん、いまはダメだよ。唯緒はおつかいのとちゅうだからはやくかえやないといけないの」

「やー! ひの、にーにとあそぶの!」

「こらひのめ、我儘言つたら唯緒ちゃんが困るでしょ」

「やー、やだー！！！」

「じゃあ、ひのちゃんもうちにおいでよ。そしたらいつしよにあし
よべゆよ」

「わーい。ひの、にーにーいっしょにーく」

「いいの、唯緒ちゃん？」

「うん、唯緒もひのちゃんとあしよびたいもん」

「こーに、はやくいこ」

「うん」

そうして二人は手を繋いで走って行く。

てぽてぽてぽてぽてぽてぽてぽてぽてぽてぽて×2

「まったくひのめったら、唯緒ちゃんと仲がいいのは嬉しいんだけど……あの娘、まともな恋愛できるのかしら？」

美智恵のその心配は将来さらに深刻な物になるのであった。

そうして唯緒は無事に家まで帰りついた。

「ただいま」

「こんにちは」

「おかえりなさい、唯緒。あら、ひのめちゃんいらっしやい」
「こんにちは、おばちゃん」

「おかあさんただいまっ！はい、とりのおにくさんかってきたよ」
「よく買って来てくれたわね。唯緒はお利口さんでいい子よ」

にこにこ笑いながら唯緒は買って来た鶏肉を百合子に渡し、百合子は唯緒を抱きしめて頬ずりをする。

「きゃあ〜、くすぐったいよおかあさん」

「にーに、はやくあそぼ」

「うん！おかあさん唯緒、ひのちゃんとあしよぶね」

「あ、分かったわ。ひのめちゃん、ゆっくりして行きなさいね」

「は〜い」

そうして二人は唯緒の部屋へと行き、暫くするときやつきやつと楽しそうな笑い声が聞こえて来た。

「こんにちは、百合子さん。ひのめがお邪魔してます」

「あらいらっしやい美智恵さん。かまいませんよ、唯緒もひのめちゃんに来てくれて喜んでますし」

その後、帰って来た父親と一緒にひのめと美智恵も横島家で夕食を食べ、ひのめはどうやら今夜は泊って行く事にしたようだ。

「ふう〜、満腹だ。唯緒が勝って来てくれた鶏肉はとっても美味しかったぞ」

「えへへ〜、おしょまちゆしゃまでした」

「ぐっ……うつつ……ああーっ！！唯緒は本当に可愛いなあ〜！！」

「やゝゝ！おとうさん、おひげがいたいよ！！」

大樹は涙を吹き飛ばしながら唯緒を抱きしめて頬ずりをするが唯緒は頬に擦れる髭を痛がる。そして当然……

「何やつとるんじゃー！ーっ！ー！ 唯緒が痛がつとるやないか、この宿六！！」

「ぐぎゃあああー！ー！ー！ー！ー！ーっ！ー！」

モザイク処理が必要な物体になり下がったのであった。

「さ、あんなのは放っておいて二人でお風呂に入ってるっしやい」
『はゝゝい』

「娘とお風呂！ー！ 父親の永遠の夢！ー！」

「朝まで逝つとれ！ー！」

「ぬあー！ー！ーっ！ー！」

かいしんのいちげき

タイジユをやつつけた（笑）

「すうすう…にーに…すうすう」
「くうくう…むにゃ…えへへ」

そしてひのめと唯緒は一つの布団の中で寄り添うように眠りについていた。

「まったくひのめったら、夢の中まで」
「ふふふ、唯緒はどんな夢を見てるのかしら」

娘達の穏やかな寝顔を見ながら母親達の顔もまた穏やかだった。

そんな唯緒の見る夢は……………

『おにいちゃん』

『お、来たな唯緒』

夕焼けに映える草原に横島忠夫は立っていて、走り寄り飛びついて

来る唯緒を優しく抱きとめる。

『おにいちゃん！きょう唯緒ね、はじめてのおつかいがんばったんだよ』

『そっか〜、唯緒は偉いな』

『えへへ、もつとなでなでして／＼／』

唯緒は兄、忠夫に頭を撫でられながら忠夫の胸にじゃれ付いている。

何故此処に二人がいるのか？それは最高指導者達によって逆行転生した際に男ではなく女として転生した為かその体にはもう一つの意識が生まれていた。

その為横島は新しい体をその意識に譲り、自分は守護霊といった立場で唯緒の意識下に引っ込んでいる事にしたのだ。

だから唯緒が眠りについた時などにこうして意識下で会い、話し合う事などが出来るのであった。

『しよしてね、タマモおねえちゃんにアイスをごちそうしてもらってひのちゃんとあしよんでおふるもいっしょにはいったんだよ』

『良かったな、唯緒』

『うん』

膝の上に抱いた唯緒と遊びながら横島は彼女の事を考えていた。

《ルシオラの魂は何故か唯緒の方に入ってしまったてるからな。唯緒も将来は人外の力を得るかもしれん、例えそんな事になったとしても俺が必ず護ってやるからな！……しかし、可愛く成長した唯緒に悪い虫が着くと思うと……、許さん！！ 唯緒と付き合うにはまず俺に勝ってからでないと。フフフフ》

何気に横島もシスコンの兄バカになっている様だ。

膝の上で無邪気に笑う唯緒を見て横島はただ、彼女の穏やかな幸せだけを願っていた。

《俺の、いや俺達の方まで幸せにならなくちゃな。なあ、唯緒》

｝ f i n ｝

「唯緒、はじめてのおつかい」（後書き）

という訳でとりあえずの終わり。

唯緒と忠夫は同一の存在であると同時に兄妹でもあるという設定です。

ですからネタバレな事を言っていると唯緒が影法師シャドウを出したとしたら横島が出て来るといふ裏設定もあつたりします。

続きは「ネギま！」とのクロスを考えているといったけど「タダオキュート」にも繋げようと思えば繋げられるんだよね、困ったものだ。

ではこの辺で。（＾o＾）ノシ

魔法少女！？ タダオキユート（前書き）

N i g h t T a l k e r から引っ越してきました。

この作品の横島は唯緒では無く、忠緒と言う名前です。

……まあ、丁度頭が病んで逝た時に描いた作品です。
元ネタは「おと×まほ」でございます。

魔法少女！？ タダオキキュート

時間は深夜、誰もが眠りに就いているであろう時間帯。
空の上では一つの闘いが行われていた。

ガオオオーーーーンッ！！

「くっ……このおーーーーっ！！」

異形の姿をした巨鳥は少女に襲いかかるが少女は何とか、かわして行く。

ガオオオオーーーーッ！！

再び襲いかかる巨鳥の爪に少女のコスチュームの一部が切り裂かれ、その肌が少し晒される。

「わっ、わわわ／＼……な、何をするんだよーーーー！！」

ゲッゲゲゲゲゲゲ

巨鳥はその姿を見ていやらしそうに笑う。

「よっしゃーっ！！ ナイスだ、もう一声！！」

そんな少女と巨鳥の闘いを屋根の上からビデオカメラで撮影してい

る小さな動物がいた。

「こらーっ！っ！ ラル、何してるんだよーっ！！」

「いやー、せっかくだから記録映像を」

「そんな物撮るなー！！」

彼の名はラル。オコジヨの姿をした少女のパートナーである。

「そんな事より早くトドメを」

「分かってるよ、行つけー！！ グローリー・フェザー。 “ 紅い

羽根乱舞 “ 」

少女の持つている杖、オリジン・キーグローリー・フェザーに付いている片翼が羽ばたく様に開くと、幾重もの紅い羽根が巨鳥に襲いかかる。

ギョワワアアアーーーーー！！！！

巨鳥は断末魔の悲鳴と共に光となって碎け散る。

「ふう、やっと終わった」

少女は安堵のため息を吐くが、ラルはそんな少女の姿をローアング
ルで撮影していた。

「うひひひひ、今日もいい絵が撮れた。さあ、早く帰って編集を…
ふぎゃっ！！」

少女はラルを思いつきり踏みつけるとビデオカメラを取り上げる。

「没収！！」

「そ、そんな…酷いよタダたん」

「酷くない、それからタダたんって呼ぶな！！それに大体……」

少女？はビデオカメラからDVDを取り出しタイトルを確認する。

「何なんだよ、この恥ずかしいタイトルは！？」

「何って？…見た通り『魔法少女・タダオk…ぶげらっ！』」

少女？はラルを力一杯に踏みつける。

「少女じゃないっ！！ボクは男だー！！」

少年の心からの叫びは夜空へと消えて行く。

彼の名は横島忠緒、いわゆる世間一般で言う『男の娘』である。

「魔法少女！？タダオキユート」

「タダたん、朝だよ。早く起きないと遅刻するよ」

ラルは料理帽を被り、フライパンとお玉を打ちながら忠緒を起こす。

「うっ、まだ眠いよ」

「ダメダメ。さあ、朝食の用意は済んでるから早く来てね」

部屋を出て行くラルを見つめつつ、忠緒は着替えを始める。
勿論ラルが出て行く時にこっそりと少しだけ開いて行った扉を閉めるのは忘れない。

チッ

舌打ちが聞こえたがとりあえず後で一発殴っておこうと思う。

彼の身長は145?ほどで長い黒髪は膝裏まで伸びており、家訓という事で切らせてはもらえない。

母親と父親は海外出張で今は母親の妹である横島百合花と暮らしていたが、百合花は友人と「世界各国ぶらり旅」に出てしまい今はラルと二人暮らしである。

その際に百合花は魔法少女、“チューナー”の役目を忠緒に押し付けて行ったのだった。

聞けばその友人の子供も魔法少女を押しつけられたらしい。

(接触がない為、その子供もまた男の娘だという事を忠緒は知らない)

その後、学校に登校した忠緒が机に突っ伏していると後ろから声が掛けられて来た。

「よう、どうしたんだ忠緒。えらく疲れてるみたいじゃねえか」

「あ、雪之丞おはよ」

コイツの名前は伊達雪之丞、一応ボクの親友だ。

まあ、出会いは何と言うか最悪だった。入学式の時、いきなり「ママに似ているー!!」と叫びながら飛びかかって来たんだから。それからは何となく気があって、今では親友と呼んでもいい位の関係にはなっている。

……それでも時々思い出したかのように「ママーっ」と飛びかかって来るのだが。

「やあ、横島、雪之丞、お早う」

「お早うメガネくん」

「何だ、やけに機嫌がいいなメガネ」

彼もまた、僕のクラスメイト。名前はサトシと言っらしいが（c.v.千葉繁）何故か皆はメガネと呼ぶ。

「いやー、昨夜いい物を見ちまってな。驚くなよ、魔法少女だよ、魔法少女」

「ぶっ!!」ガツンッ

「どうしたんだ忠緒？」

「い、いや別に……」

「ならいいんだが、それにしても魔法少女だと？。メガネ、お前頭大丈夫か」

「ぶっ、何とでも言う方がいい。俺は今猛烈に感激している、凄いぞ、

時空管理局は本当にあつたんだ!!」

(うつ、見られてたなんて…ん?)

忠緒が頭を抱えていると鞆がもぞもぞと動いているのに気がついた。

(ひょっとしてラル?)

ボクは鞆を掴むと廊下へと駆けだした。

「おい、何処に行くんだ忠緒」

「ち、ちよつとね」

鞆を抱えたまま廊下の角を曲がると、其処にはよく知っている顔があつた。

「忠緒じゃない、どうしたのよ？」

「あ、令子先輩」

この人は家の近所に住む美神令子さん。

子供の頃からの知り合いでお姉さんぶっている、普段は優しいんだけどその分怒るとものすごく怖い。

ちなみに、学校では先輩と呼ばせてるけどふだんはお姉ちゃんと呼ばないと怒る。

「鞆なんか抱えて…もしかしてサボるつもりじゃ」

「ないないない、ありません!!」

「そつ、ならいいんだけど」

「え〜と、令子先輩がいるって事は…」

「勿論いるわよ」

令子先輩はそう言いながらボクの後ろを指さす。

「えへへへ、タダちゃん見つけた」

「うわっ！」

後ろからボクを抱きしめてくるのは六道冥子さん。

近所にある大きなお屋敷にすむいわゆるお嬢様。

一人っ子な分ボクを弟として可愛がってくれる、それはいいんだけど若干行き過ぎな感じもする。

「冥子先輩、離してください」

「ぶっ、先輩なんて～他人行儀な～呼び方したら～いや～。お姉ちゃんって～呼んで～」

「ちょっと急いでるんですよ、離してよ…お姉ちゃん」

「うん、えへへ～」

お姉ちゃんと呼ばれて気分を直したのか、素直に離してくれる。

「何かあったの？」

「うん、ちよつとね」

「…無理やり聞こうとはしないけど話せる事は話さないよ。アンタの事は百合花さんに頼まれてるんだからね」

「うん、ありがとう令子お姉ちゃん」

「ば、馬鹿！学校では先輩と呼びなさい！！」

「は、はい。令子先輩！！」

「ホントは～お姉ちゃんて～呼ばれたい～くせに～」

ボクはその場を離れるとトイレの個室に駆け込み、鞆の中に隠れていたラルを掴み出した。

「何やってるんだヨラル」

「い、いや。タダたんがかなり疲れているみたい何で心配になって」「本音は？」

「学校ならではのお宝映像を」

ギユ~~~~ツ!!

「ご、ゴメンなさい!! 絞らないで、色々と出ちゃう…」

「そんな事より、どう言う事なんだよ! ボクの姿見られちゃってるじゃないか、認識障害の魔法がかかてるんじゃないの!？」

「あのねタダたん、認識障害の魔法はね姿が見えなくなるんじゃないかと本人と認識出来なくなる魔法なんだ。つまり知り合いに見られたとしても正体がタダたんとはれないんだよ」

「そんな話聞いてな…!! っ」

チリツ…チリツ…

その時、耳の奥を突つつく様な“雑音”が聞こえて来た。

「ラル、これって」

「どうやら出たみたいだね。“ノイズ”が」

忠緒は慌てて廊下に出る。

ザザザザザザ…

“雑音”は更に大きくなり、黒い影が徐々に異形な姿をとって来た。

「タダたん、魔法少女の出番だよ」

「で、でも、ここは学校だよ。皆に見られちゃう」

「でも闘わないと皆が傷ついちゃうよ。令子ちゃんとか冥子ちゃんとか」

「……分かった……」

「さあ、タダたん!“意味在る言葉”を――」

「グローリー・フェザー――」

忠緒が杖の名を呼ぶとオリジン・キーグローリー・フェザーは呼びかけに応じて手の中に現れる。

そして変身のキーワードである“意味在る言葉”を叫ぶ。

「“昼と夜とを紡ぐあか朱――”」

その言葉と共に忠緒の足元には魔法陣が描かれ、其処から光の粒が螺旋状に舞い上がり、忠緒の服は光になって消えて行く。

「さあ、いよいよ始まりました――!!」

ラルは興奮しながらビデオカメラで撮影を開始する。

「少しは懲りろ――!!」

忠緒は杖を振ってそんなラルのビデオカメラを粉碎する。

「あ――っ!! 僕の3万9千8百円が――!!」
「ふんっ、いい気味」

そして、服がほぼ消え去った時……

「何の騒ぎ?」

廊下の角から令子が現れた。

「れ、令子お姉ちゃん!？」

「ひゃっ!! な、何これ?…って、何をやってるのよ忠緒!？」

「ラルー!ー!! 何が認識障害だよ、しっかりばれてるじゃないか!ー!」

「いや、さすがに変身前には認識障害は関係ないよ」

「見ちゃダメー!ー!! 見ないで令子お姉ちゃん!ー!」

忠緒は瞳を涙でうるませながら両手で下半身を隠し後ろを向く。
しかし、彼は男ゆえに胸は無く、ささやかながら（涙）男性としての象徴はあるがそれ以外は女性の様な完璧なまでのプロポーションを持っていた。

だからこそ、

「そ、そんな事言ったって／＼／」

令子は目を反らせずにその光景を見つめている。

「そうだよね、こんな素晴らしい光景から目を反らすことなんてできないよね」

「へ……ラルが喋ってる!ー!ー!？」

そっこう言ってるうちに忠緒の服は完全に消える。

さあ野郎共！！ 覚悟はいいか？
ここからが本番だ！！

光の粒は螺旋を描く様に空へと昇り、長い黒髪も巻き上がる。
そして光の粒が体を包むと白スクミたいなボディースーツに変わる。
ボディースーツの上にはメイド風味の入ったセーラー服に際どいミニスカ。

足を包んだ光はハイソックスに膝まであるブーツに変わる。（つまりは絶対領域！！）

両手首には赤いリボン、長い黒髪は右側8と左側2のアンバランスなツインテール。（だが、それがいい）

魔法少女タダオキキュート、変身完了！！

「うっっ、れ、令子お姉ちゃん…見た？」

忠緒は顔を真っ赤に染め、瞳を潤ませながら令子に聞く。

「ひゃ、ひゃひゃほ…あんひゃいつひゃい……」

令子もまた、真っ赤な顔で鼻を押さえながらそう応える。

（令子お姉ちゃんの手の隙間から零れてくる赤い何かは気のせいだ
と思いたい）

忠緒が赤い顔で俯いていると。

「タダたん、早くノイズをやっつけないと」

「……そうだよね……みんなあのノイズが悪いんだよね……フフフフ」
体から黒い何かを噴き出す忠緒を見てラルは少し後ずさる。

「こ、これは……これが噂の病化」

その後、ノイズは無事退治されたがそのやられっぷりはラルが涙を流しながら同情するほどの物だったといふ。

「なるほど、そう言う訳なのね」

放課後、学校帰りの公園で知られた以上隠しきれないと忠緒とラルは令子に全てを説明した。

「うん、黙っててごめんね」

「仕方ないわよ、事情が事情だし。それより、そうね……よし、決めたわ!!」

「何を？」

「私があなたのサポートをしてあげる」

「そんな、ダメだよ！！ 令子お姉ちゃんを危ない目に合わせたくないよ」

「それは私も同じよ。忠緒がこんな危ない目にあってるって分かった以上は知らんぷりなんて出来ないわよ」

「ラル〜」

「令子ちゃんが一度決めた事を変えないって事は知ってるだろ、諦めるしかないよ」

「そう言う事。大丈夫よ、お姉ちゃんが守ってあげるから」

こうして、魔法少女タダオキュートの闘いは新たなパートナー、美神令子を加え新たな局面を迎える事になった。

「ところでラル、忠緒の魔法少女としての写真とか無い？」

「任せときな姉さん！姉さんには特別に俺っちのお宝映像集を分けてやるぜ！！」

「あら、話せるわね」

二人が怪しい笑いをしていると忠緒が食ってかかる。

「令子お姉ちゃん何してるのさ！？ラルも何か憑いちゃいけない物アルベール・カモミールが憑いてるよ！！」

「ほら、これなんか」

「ぶはっ！！こ、これだけでご飯は三杯は食べられるわね」
「お姉ちゃんのバカー……！！」

これはまた、遠い遠い何処か世界の物語。

無理やり終ります。

魔法少女！？ タダオキュート（後書き）

……、と言つ訳で男の娘の横島忠緒のお話でした。

何で俺ってこんな話ばかり思いつくんだろ……。

「GS美神×めだかボックス試し書き1」（前書き）

N i g h t T a l k e rからの修正を加えての移動です。

連載物の更新が滞っているのはゴメンナサイです。

めだかボックス、アニメ化嬉しいです。話は何か重くなってきましたけど……

「GS美神×めだかボックス試し書き1」

試しの一箱「謹んで拝命せよ」

箱庭学園生徒会長、黒神^{くろかみ}めだか。

彼女は生徒会室の自分の席で書類の整理に没頭している。
幼馴染である人吉善吉^{ひとよしぜんきち}もまた、彼女の仕事を手伝っている。

其処に一人の男が扉を開いて入って来る。

彼の名は箱庭学園二年四組、横島忠夫。

「めだかちゃん、頼まれていた窓枠の修理終わったよ」

「御苦労！！ 何時もながら横島二年生は仕事が早いな」

「と、ゆーか俺は生徒会の役員じゃないのに何で生徒会の仕事を手
伝わされとるんじゃない？」

「諦めて下さい、横島先輩。めだかちゃんにその無駄に凄い器用さ
を知られたのが運の尽きっス」

人吉善吉は心から同情した表情で横島の肩に手をやる。

「しかし、この所こいついった雑用ばかり押し付けられて疲れきった
この体はその見事なまでの胸の中で休ませてもらうしか」

「ちょ、横島先輩何を！？」

「ん？そんな事でいいのなら私は別にかまわんが」

「それじゃ遠慮なく、めだかちゃんっ！！」

「駄目ですってば、横島先輩！！」

横島は善吉の制止を振り切りめだかへのルパンダイブを決行する。
……が。

「横島あーっ！！ めだかさんに何をするーっ！！」
「ぐぼはあっ！！」

其処に突如その場に現れた阿久根高貴あくねこうきに横島は殴り飛ばされる。

「ふっ、汚い手でめだかさんに触れようとするからだ」

その後、柔道技のオンパレードによってズタボロにされ、肉塊とでも表現するような姿になった横島を見下しながらそう言う。

「?? 善吉、阿久根書記は何をあんなに怒っておるのだ？」
「……めだかちゃんもつと女としての危機感を持った方がいいと思うぜ」

善吉が溜息を付きながらそう呟いていると、

「あゝ、死ぬかと思った」

横島はあっさりと復活してきた。

そんな横島を見ながら阿久根は不思議そうな顔をしながら話しかける。

「何でお前の様な異常性アフノーマルな奴が一三組に入れられなかったんだろうな？」

「俺が知るか！！ と、ゆーより俺は異常性じゃない！！」

【そつだな、横島は異常性や過負荷じゃなく、どっちかと言うと否
チ・ノーマル
普通にカテゴライズされると思うぜ】
「お姉様」

黒神めだかに姉と呼ばれた女性は名瀬天歌。なぜようか実はめだかの姉で、黒
神くじらと言う名前だ。

「天歌、何じゃその否普通とゆーのは？ワイはれっきとした普通の
一般人だぞ」

【てめえ、俺様が古賀ちゃんを改造して使える様になった再生能力
を生まれつき持っているくせに普通面しやがるとはふてえ奴だな。
ノーマル
ところで横島】

「何じゃい？」

【俺様に改造される覚悟は出来たか？
いじくりまわ

「出来る訳ないじゃろーが！ー」

【ちっ！我儘な野郎だな】

「全くだよ。名瀬ちゃんがせっかく改造してくれると言ってるのに」

天歌の後ろから彼女を抱きしめ、頬を膨らませながらそつ言つのは
こが
古賀いたみ。

元々は普通であつたが天歌の改造を受けて異常性に覚醒、十三組の
ナーマル
・パーティ
十三人の一員となつた少女である。

「改造されるのを嫌がる事を我儘とは言わん」

横島が名瀬や古賀と言いつていると書類の整理が終わつたのか、
めだかが書類を持って立ち上がる。

「よし、出来たぞ」

「めだかさん、何ですかその書類は？」

「ふっふっふっ、聞いて驚くがよい。生徒会の新役職の申請書だ」
「新役職？」

めだかは扇子を横島に向け、高らかに語りかける。

「喜べ、横島二年生。貴様の為に新たな役職を作ったぞ！！これで貴様も晴れて生徒会の一員だ」

「……何や、嫌……な予感しかせんが何じゃその役職とは？」
「うむっ！！ 貴様の役職はズバリ『丁稚』だ。謹んで拝命せよ」

凜っ！！

「凜っ！！ じゃねえーーーーっ！！ 嫌に決まっとうろっがーーーーっ！！」

「むっ、我儘な奴だな」

「あーーーー、もうーーーー！！ この姉妹はーーーーっ！！」

「ならば、^{きかいしま}喜界島会計の様に日給を払うとしよう。255円でどうだ？」

「何なんやー、そのピンポイントな金額は！！」

「決定だな」

「諦めましょう、横島先輩」

「くそーーーーっ！！ 何でワイはこの手の女に逆らえんのじゃーーーーっ！！？」

答え・横島だからです。

試しの二箱「『男の娘』という人種」

「実は目安箱にこの様な演劇部からの投書があったのだが」

箱庭学園生徒会長の黒神めだかは相談事が書かれている便箋を読みながらそう呟く。

「どんな相談なの？」

そう聞き返したのは人吉善吉の母親、人吉瞳^{ひとよしひとみ}である。

「はい、何でもある登場人物に相応しい人材を探してほしいとの事です」

「どんな登場人物なんだよ、めだかちゃん？」

「うむ、ある富豪に仕えるメイドらしい。部員の中にはそのイメージに相応しい人材が居ないとの事だ」

「それはおかしいわね、演劇部には美少女が揃っている筈なのにメイド役に相応しい子が居ないだなんて」

善吉の疑問にめだかは答え、瞳がさらに疑問を投げかける。

「それなんですけど何でもそのメイドとやらは『男の娘』という人種らしくて搜しているのは女装が似合う男との事です。ところで横島丁稚は何処へ行くのだ？」

娘こと言う件くだりの辺りから横島はめだかに気付かれない様にソロソロと逃げようとしていたが生憎とめだかの視界からは逃げられなかった様だ。

「ああ、そうだ！！ 忠夫くんが居たじゃない」

「ひ、瞳さん。横島がどうかしたんですか？まさか横島に女装をさせるつもりでは……」

「そのつもりだけど？」

よこしまはにげだした。

しかし、とびらがひらかない。

「ああーっ！！ 鍵が、鍵が、扉が開かないーっ！！」

「よくは解らぬがどうやら貴様の出番の様だな、横島丁稚」

ほくそ笑むめだかの手は机の下に隠されているスイッチを押している。どうやら扉の開閉ボタンらしい。

「ちょっと待って下さいめだかさん。いくら何でも横島に女装は無理があり過ぎるでしょう。横島にやらせる位ならまだ善吉くんの方が」

「ちよつとっ！！ 阿久根先輩、何を」

「うゝゝん、それはそれで魅力的な提案なんだけど」

「お母さんまで何を！？」

「忠夫くんには実績があるんだよね」

瞳はそう言いながら笑顔で十数枚の写真を取り出す。その写真には可愛らしい三才位の美少女が写っていた。（例えて言うなら、てば唯緒ちゃん）

「わー、可愛い」

「本当だ、見て名瀬ちゃん」

【確かにこの可愛さにはさすがの俺様も心踊らされるな】

喜界島、古賀、名瀬の三人は写真の女の子を見て頬を赤らめているが逆に横島の顔は青ざめて行く。

「な、何で瞳さんがその写真を……」

「だってこの写真は私が撮ってあげたんだし」

「え……も、もしかして瞳さんはウチのおかんと……」

「うん。百合子さんとは心の友と書いて“心友”しんゆうだよ」

「お、お母さんが撮った写真で横島先輩が此処まで慌てるという事は……」

「もしか、この愛らしい少女は横島丁稚なのですか？」

「ピンポン、大当た「わー、わー、わー、わー！！」」

「五月蠅いぞ横島丁稚【平伏せ。】」

「ぶべらっ！！」

慌てて瞳の発言の邪魔をしていた横島だが、めだかの『言葉の重み』によって地面にめり込む勢いで平伏せられた。

「では、話を戻しましょう。この件は横島丁稚を外向させるという事で」

「そ、それじゃ横島先輩があんまりにも……」

「うーん、じゃあ善吉くんがやる？お母さんとしてはそっちの方が」

「横島先輩で行きましょう！！」

「善吉くん、君って奴は……」

「嫌じゃー！！！！」

「あつ、横島が逃げた」

横島は飛び起きて窓から逃げ出そうと駆け出し、古賀がそれを咎める。

だが、すでに横島の前には瞳が待ち構えており彼女は背中の中のランドセルから数枚の布と化粧道具を取り出すと頭上に放り投げその手には裁縫道具が握られていた。

「んふふふ。逃げられないよ、忠夫くん」

瞳はほくそ笑むと超スピードで横島とすれ違う。

『お母さんのたしなみ』

『華麗なる創造神！！』

「ふう、いい仕事をした。皆、どうかな？」

手の甲で額の汗を拭き撮りながら瞳はそう呟き、その手には横島が身に着けていた制服があり、めだかや善吉達も横島のその変わり様に啞然としていた。

「なっ！？ こ、これは……。横島、貴様……」

「ば、馬鹿な！！ 横島がここまで可憐な美少女に」

「よ、横島先輩？」

啞然としていたのは横島も同然で何時の間にか着替えさせられていた自分の格好を見てワナワナと赤い顔をして震えていた。

「な、名瀬ちゃん」

【す、凄え……『舞い上げた布でメイド服を創りつつ、横島の服を剥ぎ取りつつ、マッサージなどで体の体形や骨格を整えつつ、創ったメイド服を着せつつ、化粧をしつつ、横島を完璧な美少女に創り変えたがった』まさに、華麗なる創造神。そ、尊敬するぜ】

……、そして其処に来てはならない男、黒神真黒くろかみ まくろが現れた。

「なんだか賑やかだけど何の騒ぎだい？……、こ、これは……」

「…… お、お兄様……」

【…… あ、兄貴……】

めだかと天歌の姉妹は来てしまった兄に戦慄を覚えながらも僅かばかりの理性に期待していた。

…… 無駄と知りつつも。

「そうか……、解ったよ忠夫ちゃん」

「な、何をじゃ？」

真黒は一呼吸すると満面の笑みを浮かべ、両手を広げて叫ぶ。

「忠夫ちゃん、君の気持は解った！！ 今日から君も僕の妹だ。さあ、変態おにいちゃんの胸に飛び込んでおいで！！」

そんな真黒の胸に飛び込んで来たのは……

「怨敵退散!!」

「ぼこはあつ!!」

乱神モードで真黒を殴り飛ばすめだかと、

【凍って燃えろ!!】

「ぎゃぎはあつ!!」

見た事のない能力で真黒を凍らせて燃やす天歌であった。
スキル

「な、名瀬ちゃん…、その力は？」

【兄貴への身も凍る様な拒絶感から生まれたこの過負荷を、兄貴へ
マイナス
の燃え盛る様な怒りから生まれたこの過負荷を、俺は『凍る火柱』
マイナス
と命名する】
アイスファイア

何と言う事でしょう!?

名瀬天歌は兄、黒髪真黒への拒絶感と怒りから過負荷を、覚醒して
マイナス
しました。

皆が啞然とする中。

とはぐらかしている。

そして生徒達からはファンレターやラブレターなどが大量に送られてきたがすべて横島の手によって焼却処分されていた。

そして、瞳から送られて来た写真を見た百合子が大急ぎで帰国の準備をしている事を横島はまだ知らない。

終わってください。

「GS美神×めだかボックス試し書き1」（後書き）

脈絡の無さは試し書きと言う事で御勘弁下さい。時系列的には生徒会戦拳編の前と言う所です。

後、名瀬天歌のセリフの括弧が【 】なのは原作での吹き出しをイメージしました。

天歌が自身の改造ではなく真黒への怒りから過負荷^{マイナス}に目覚めたのもこの話の中だけの設定と言う事で勘弁して下さい。

「いざる軍団、来襲!!」

チュンチュン……

今日も朝が来た、さわやかな朝だ。
だが、俺はそんな気にはなれない。何故ならば……

「せんせ〜!!」

来た! 朝になると俺の都合などこれっぽっちも考えずにシロは俺を散歩に誘いに来る。

普通の散歩なら別にかまわない。だが、それが数十キロにも及ぶ全力疾走となると話は別だ。

「先生! さあ、散歩に出かけるでござる。新しい朝が来たでござるよ、希望の朝でござる」

「それは散歩ではなく体操でござるよ」

ん?……「う、この声は!!」

「お、お主は楓殿!? 何の用事でござるか!!」

「忠夫殿に勝負を挑みに来たでござるよ」

「何を言ってるでござる! 先生は拙者と散歩に行くでござるよ!」

あいつ等は……

今、外でシロと言い争っているのは長瀬楓。麻帆良学園都市にある女子中等部の三年生だ。

仕事がらみで知り合った女の子だが俺の闘い方に思う事があったのか、それ以来何度も勝負を挑まれている。

麻帆良学園女子中等部、あそこは正に地獄だった。

通っている娘は皆、ナイスバディだが中学生、中学生なのにナイスバディ、手を出せばロリペド一直線なのだ、よく耐えた、偉いぞ俺。

特にあのルチ將軍！！ 木乃香ちゃんの爺ちゃんは俺を木乃香ちゃんの婿にしようと躍起になってたからな。

「此処に来たのは楓殿だけでござるか？刹那殿や古菲殿は？」

「皆には内緒で来たでござるよ、今頃悔しがっている頃でござるな」

とにかくこれ以上騒がれてはたまらない、後で文句を言われるのは俺なのだ。

「おい、いい加減にしないか！！ 近所の迷惑を考えろ！！」

「先生、お早うでござる……」

「ようやく目覚められたでござるか。さあ、さっそく勝負でござる

「!!」

そう言いながら二人は扉を開いた俺の所に駆け寄って来る。

「まあまあ、二人共。忠夫殿の迷惑も少しは考えるでござるよ、ニンニン」

「……そう言うお前は此処で何をしとる……」

「朝の挨拶のついでにでえとの誘いに來たでござるよ」

この何時の間にか部屋の中で逆さまにぶら下がっている娘は川端綾女。乙女学院の生徒だ。

乙女学院、それはデタントのテストケースとして創立された神族、魔族、妖怪、そして人間が集められた学校の事で何故か女子校だ。

そして今、何故か俺はその乙女学院に交換留学生として通わされていてこの綾女という忍者オタクの少女はクラスメイトの一人である。中々の美女ぞろいだが創立にキーさんとサッチャーンが絡んでいる事、学院長がノーヤンというあからさまに怪しいぢぢいなのでもし女生徒に手を出したらどうなるか分からないのでナンパは控えている。つまり、あの学校も俺には地獄に等しい。

後、乙女学院には神界からモビィ・モ・ラールと言う奴と魔界からヤクト・ヤン・キーと言う奴も通っている。この二人、何故か妙に俺と気があう。

「おのれ綾女!! 何時の間に先生の部屋の中に!？」

「勿論、何時の間にやらでござるよ」

「油断のならない女でござるな」

（何か嫌な予感がするな。こいつ等が言い争っている間に逃げるか）

そうして、そゝと気付かれない様に歩いて行き、もう少しで道路に出ようとした時…

「はあはあ……よ、ようやくたどり着いたでござるよ」

此処には居ない筈の女性が現れた。

「師匠――！！ 会いたかったでござるよ――！！ びふてき、や
つと師匠に会えたでござるよ」

『もー、もー』

この娘は千影流忍一族の二女でしのぶという名前だ。“びふてき”とは彼女のペットというか友達で、二足歩行する小さな牛である。海上での除霊の際、俺一人だけ遭難した事がある。その後俺は藍蘭島という島に流れ着いた。

その島は12年前の“漢だらけの大神釣り大会”の大会中に起こった100年に一度級の大波に巻き込まれた為に男が一人もいない女性だけの島だった。

女性だけ……俺は今度こそ本物のハーレムじゃ――！！……と浮かれていたんだが其処に居る女の子は殆んどが年齢対象外、こんなことたるーと思つたよ、チクシヨ――！！

たまに年齢的にOKだと思ったら思い人がいたり（その相手がペンギンだと知った時は思わず呪いをかけそうになったが）見るからに幼児体型だったり……

12年ぶりに現れた男と言う事で「こと」という婆さんには婿殿よばわりされるし女の子達には追いかけて回されるしで大変だった。

何しろ男に免疫がないせいか風呂に入っけていても平気で裸で入って来るし、もし一人だけでも手を出したりしたらあの婆さんの事だ、島の女性全員と関係を持たされる事だったに違いない。

いや、それはともかく……

「何でお前が此処に居る？藍蘭島の周りには大渦が渦巻いていて外には出れない筈だが」

「師匠を捜して彷徨い歩いていたら何時の間にか此処にたどり着いていたでござるよ」

「何処の響良牙だお前は……皆は元気だったか？」

「まあ、皆それなりに元気でやってるでござるよ。……すす殿は少し寂しそうでござったが」

「そっか……」

思えば彼女には可哀想な事をしたな、今度会いに行つてやるか。

「ところで忠夫殿、その女性は誰でござるかな？」

「ずいぶんと親しそうでござるな、ニンニン」

「先生？……師匠とはどういう事でござるか！？ 詳しい説明を求めらるでござるよー！ー！」

『ヨコチマ、一緒にゲームをするでござるでちゅ』

「横島さん、クッキーを作ったから食べてほしいでござるえ」

「忠夫クン、一緒に走ろうよ…でござる」

「忠夫様、この藁人形で一緒にあやねを呪わない？でござるわ」

「もう勘弁してくれーーーー！！」

終わってみよう。

「いざる軍団、来襲!」(後書き)

と、言う訳で思いついたまま書いてらこうなった。

何故か横島ってござるっ娘と相性がいいよね。

ネギま!・ハイスクール・オブ・ブリッツ・藍蘭島・とこちやまぜ
にしてかなりのカオスになってしまった。
殆んど探索日記だなこれは。

では、そういう事で。(・・・)ノシ

「メイドで行こう!!」

「全く、アンタはとんでもないドジをかましてくれたわね!!」
「す、すんませ〜ん」

ある日、美神除霊事務所の面々はとある企業からの除霊依頼を受けていた。
そして横島のちょっとしたミスから危うく悪霊を逃がす所だったのである。

「罰として今後半年間給料無し!!」
「そんな殺生な〜っ!!」
「み、美神さん。それはいくら何でも」
「と、言いたい所なんだけど其処までするとママがうるさいから勘弁してあげる」
「た、助かったあ〜」
「良かったですね、横島さん」

安堵の表情を浮かべる横島であつたが、美神の目には怪しい光が灯つていた。

「安心するのはまだ早いわよ。横島くんには”こんな事もあるつかと”用意していたコレを着てもらうつわ!!」

そう叫びながら美神が荷物から取り出したのは……、

一着の『メイド服』であつた。

「み、美神さん？……」

おキヌが目を丸くしていると。

「み、美神さん……、アンタは一体どんな”こんな事”を想定して
いたんじゃない……っ!!」

そして数日後……

「やあ、令子ちゃん。横島君がまたミスをしたんだって？」

オカルトGメンの西条は喜々とした表情で事務所に入ってきた。

「そうなのよ、幸いに除霊はうまくいったけど危うく除霊失敗で違
約金を支払うはめになる所だったのよ」

「全くしょうがないなあ横島君は」

そう言いながらも西条の顔は清々しいまでの笑顔に包まれている。
よほどライバルである横島の失敗が嬉しい様だ。

「ところでその横島君は？」

「今、罰を与えている所よ。何をしてるの！お客様よ、早くお茶を持って来なさい、横島ちゃん！！」

「……ちゃん？」

そう呼ばれて、台所から現れたのは膝裏までもある長く艶やかな黒髪に真つ赤なりボンを付けて、あるう事がメイド服にその身を包んだ美少女だった。

そう、何時ぞやのエクトプラズムスーツを使って女性の姿になった横島だった。

どうやらこれが美神が横島に与えた罰らしい。

「いらっしゃ……何だ、西条か」

「な…な、な、な？よ、横島君なのかい？」

「こらっ！！ お客さまに対して何よその態度は。ちゃんと教えた通りにやりなさい！！」

「で、でも美神さん。いくら何でも西条相手に…」

「一週間、罰を延長しましょうか？」

「わかりました……」

横島の顔は悔しさと恥ずかしさで真つ赤だった。

西条は西条で何が何やらと混乱していたが目の前の美少女から目が離せないでいた。

おキヌやシロタマもそんな西条を見て「あはは」と笑う事しか出来なかった。

「い、い、いらっしゃいm」

「違うでしょ！！　はい、もう一度！！」
「ううゝゝ」

美神はパンパンと手を打ってダメ出しをする。
横島は俯き、目尻に涙を浮かべながら更に顔を赤くする。

「お、お帰りなさいませ……ご、ご主人様……」
「……………」
「ごぼはあつ……」

西条は大量の鼻血を噴き出してぶっ倒れた。

「ああつ、西条さん！」

「やっぱり、ヨコシマのアレは破壊力が有り過ぎるわね」

「拙者も初めて食らった時は一昼夜生死の境を彷徨ったでござるよ」

「ほー！ー！　ほほほほほほほほ！！　横島ちゃんの正体を知っている西条さんでさえこの有様なんだから美神除霊事務所の看板娘としては申し分ないわ。さあ、稼ぐわよ！！」

どうやら、罰と言うよりそれが目的だったらしい。

「ううゝゝ。何でワイがこんな目に……」

それからというものの、美神除霊事務所は美神の作戦通りに大繁盛した。

美少女メイド事務員がいるという事で依頼者が殺到したのである。
美神に逆らえない横島は泣きながらもメイドとして対応せざる他なかった。

とは言え……

「ママに似ているー！ー！！」

と、飛びかかって来るマザコンや、

「う、美しい…」

と、首筋に牙を突き立てようとするバンパイアハーフや、

「やあ、今日も綺麗だね横島ちゃん」

と、花束片手にやってくるエセ紳士や、

「お…うへへへへ、オンナー！ー！ー！！」

と、野生に還る薄い影の虎などは遠慮なしに半殺しの目に合わせていた。

（特に、女性陣の手によって）

そんなある日……

『美神オーナー、お客様です』

「お客？仕事の依頼者なの」

『い、いえ。横島さんの…』

「俺の何だ？」

人工幽霊が返事をする前に部屋の扉が開く、横島は条件反射で挨拶

を……………してしまった。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

ペコリ

『……………お母様です』

「……………何をしてるんだい？……………忠夫…」

自分の母親、GM横島百合子に。

「へ……………お、お袋……………!？」

「た、忠夫……………お前は、お前は……………」

百合子はメイドの姿をしている横島の全身を見ながらワナワナと震えていた。

「せ、先生の御母堂でござるか？拙者は横島先生の一番弟子のシロと……………」

「このバカ犬!! 今はそんな事を言ってる時じゃないでしょ!!」

「犬じゃないでござる、狼でござる!!」

「よ、横島さんのお母さん。こ、これには深い訳が……………」

「わ、私は止めたんですよ。でも横島クンがどうしてもやりたいと」

「美神さ……………ん!! アンタって人は……………!!」

事務所のメンバーが混乱に陥っていると百合子はゆっくりと近づいてきて横島の肩をがっしりと掴む。

「忠夫、お前は……………」

「堪忍や……………おか……………ん!!」これにはチョモランマより深い

訳が――！！」

横島は母親のお仕置きの名を借りた死刑執行に怯えていたが、百合子の反応は横島達の考えの遙か彼方の斜め上を行っていた。

「お前って子はなんて親孝行なんだい！！」

「…へ？……」

「私達は娘が欲しかったんだよ、そんな私達の為に娘になってくれるなんて……ああ、私はお前を誇りに思うよ」

「あの……、もしもし……お母様？」

「こうしちゃいられない、さあ忠夫！買い物に行くよ。女の子には色々と買いそろえなければならぬのがあるからね！！」

「ちよつと、落ち着いてくれよ母さん！俺は別に本当の女になった訳じゃ……」

「こらっ！女の子がそんな乱暴な言葉使いをしちゃ駄目じゃないか！！」

「話を聞いてくれ――！！」

美神達が口を挟む暇もなく、横島は百合子によって連れられて行った。

「み、みみみ、美神さは……ん！横島さんが」

「はっ！あまりの事に動けなかったでござる」

「どうするのよ美神！？」

「どうするって……どうすればいいのよ――！！」

それからというもの。

「さあ、唯緒次はこのドレスを着てごらん」

「だからな、母さん！俺は別に女になつた訳じゃなくて……」

「私」

「だから、この姿はエクトプラズムスーツで女に見えるだけで俺は男……」

「わ・た・し」

チャキツと首筋に柳刃包丁が当てられる。

「わ……だ、だからね、私はこんな姿をしてるけど見せかけだけで本当はちゃんと男の子なんだよ」

「その事なら心配はいらないよ。ちゃんと考えがあるからね」

「な、何の？」

「だからお母さんに任せておきなさい。あつ、このミニスカートも似合いそうだね」

「うつ、ワイは一体d」

チャキツ

「……私は一体どうなるの……？」

村枝商事において。

「ケンちゃん、お久しぶりね」

「おおっ！横島君、どうしたんだい？」

「実はある事情があつて日本で暮らしたくなつたんで専務を何処かにやってうちの旦那を本社勤務に戻してくれない？私も出来るだけ」

会社に貢献するから」

「コラー横島っ!! 何勝手な事を!!」

「うゝゝむ、そうだな」

「社長!何を悩んでるんですか、私は反対ですよ!!」

「社長、丁度タンザニア支社の係長のポストに空きが」

「クロサキ、てめえー!ー!」

某・異空間。

「と、言う訳で唯緒を本当の女の子に出来ないかしら?」

「そうやなく、どうやキーやん?」

「幸い、今はエクトプラズムスーツを使っていて女性の姿ですからね。因果律を歪めて性別を変える事はそう難しくありません」

「ならやるか?」

「やりましょう!!」

「ありがとう、お二人なら解つてくださると思ってましたわ」

「ええ、解りますとも」

「おもしろくなつて来たで!!」

「ほほほほほほほほ」

「はははははははははは」

「『わーっはははははははははははははははは!!』」

三柱: もとい、一人と二柱が笑っている後ろで百合子の送り迎えを担当していたジークはそのプレッシャーに耐えきれず、立ったまま気絶していた……泡を吹きながら……。

それから暫くの時が立ち、横島忠夫改め、横島唯緒は完全な女性体になっていた。

言葉使いなども百合子の手によって変えられていた。

そして横島はというと何時も通りに事務所でメイドをしていたのだが。

「何でこんな事になっちゃったのよー！ー！！」

彼女は今、全力で逃げていた。何からと言うと……

「横島さー！ん！！ 僕は雪之丞達と違ってフリ です。僕が貴女にルシオラさんを産ませてあげます！！」

「そんな直接的な表現はやめてー！！！！」

「待ちたまえピート君、君はまだ高校生だろ。ここは社会人である僕が」

「アンタだけは何があっても絶対に死んでもイヤッ！！」

「横っちー！！！！ 俺はずっと以前からお前の事をー！！！！！！」

「それはずっとホモだったって事じゃないー！！！！！！」

「横島ー！！！！ 弓とは別れて来たぞ。俺がお前をママにしてやるー！！！！！！」

「何を考えてるのよ、このド外道ー！！！！」

「横島サー！ん！！！！ ワッシはー！！！！！！！！」

「猥姦はいやー！！！！！！！！」

男達に連日追いかけて回されていた。

美神達はというと、

「ふふふふふ。横島ちゃん、安心しなさい。貴女は私が」

「そうはいきません。横島さんの相手は私が」

「先生は誰にも譲らぬでござるよ」

「ヨコシマは私の物よ。この九尾の名に賭けて」

そんな彼女達の手には【男】と文字を刻まれた文珠が握られていた。

「ルシオラー！ー、助けて！ー！ー！！」

ヨコシマ、早く私を産んでネ

「ルシオラー！ー！！」

その叫び声は夕陽の空に何処までも響いたといふ。

ちゃんちゃん！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3673v/>

こんな、横島忠夫はどうでショー!!

2011年11月2日13時17分発行